

K-576

米沢市埋蔵文化財報告書 第83集

大浦

大浦B遺跡発掘調査報告書

平成16年3月

2004

米沢市教育委員会

大浦

大浦B遺跡発掘調査報告書

平成16年3月

2004

米沢市教育委員会

序 文

本書は平成14年度に、米沢市教育委員会が発掘調査を実施した大浦B遺跡第IX次調査の成果をまとめたものです。調査は、民間の多目的ホールの建設に伴う、受託事業として実施しました。

大浦B遺跡は、遺跡が集中する大浦遺跡群の中心で、米沢市役所の北東約2kmの中田町字大浦に所在します。遺跡群は、最上川、羽黒川、堀立川が、合流する位置にあたり、発達した河岸段丘上に位置しています。

大浦遺跡群の範囲は、西の大浦B、南の大浦A、東の大浦C並びに北の大浦D遺跡の4遺跡からなり、大浦D遺跡は中世であることから、この遺跡を除く3遺跡を大浦遺跡群と称しております。

大浦遺跡群の調査としては、昭和59年度の第1次調査から始まり、今回まとめた大浦B遺跡第IX次調査は、大浦遺跡群の調査としては第18次調査となります。

これまでの調査によって、南に二脚門を有し、一辺40m四方に巡る柵列の内部に堀立柱建物跡を主体とした遺構群が確認されています。これらの遺構群は、土地所有者の協力により、埋め戻しのうえ盛り土をして保存しています。

遺構群からの遺物としては、漆紙文書や二面硯等が出土し、奈良・平安時代の郡衙跡と推測されています。今回の調査は、中心から離れた場所にあたり、大型の堀立柱建物跡等は確認していません。これは、従来から考えられているように、柵列に囲まれた範囲が、中心である可能性が強まつたものと考えております。

今後も、この遺跡群の周辺は、開発が予想され、それらの事業に伴う発掘の調査もあると思われますので、関係各位のなお一層のご理解とご指導をお願い申し上げます。

最後になりましたが、今回の調査に際し、ご協力いただきました土地所有者の方々に、心からお礼申しあげます。

平成16年3月

米沢市教育委員会

教育長職務代理者

教育次長 松坂 昭

例　　言

- 1 本報告書は、米沢市教育委員会が多目的ホール建設に伴う発掘調査として、2002年（平成14年）に実施した第IX次調査の成果をまとめたものです。
- 2 本調査は米沢市教育委員会が主体となって、民間会社からの受託事業として実施したものであり、期間は平成14年5月7日～同年6月10日の延べ34日間であった。

3 調査体制は下記のとおりである。

調査主体 米沢市教育委員会

調査総括 村野隆男（文化課長）

調査担当 手塚孝（文化課文化財担当主任）

調査主任 菊地政信（文化課文化財担当主任）

調査補助員 高橋拓

調査参加者 遠藤富男 笹川由紀 小関宏 高橋俊助 長澤朋人 田中正博 佐藤美喜男
野原征雄 吉村和寿 近野慶子

事務局 情野憲治（文化課長補佐兼文化財主査）

深瀬順子（文化課文化財担当主査）

月山隆弘（文化課文化財担当主任）

調査指導 文化庁 山形県教育庁社会教育課文化財保護室

調査協力 株式会社 北陽

- 4 掘図縮尺は、各図にスケールで示した。遺構平面図の方位記号は、真北に統一した。写真図版は、スケールで示した以外は、縮尺不同とした。
- 5 本報告書で使用した遺構・遺物の分類記号及び遺構の図化は、「米沢市埋蔵文化財調査報告書第15号」を参考にした。
- 6 出土した遺物の出土箇所については、挿図で示した。
- 7 遺構等の土層については、「新版標準土色表」（小山、竹原1973）を準拠した。
- 8 本報告書の作成は、菊地政信が担当した。全体的には、手塚孝が総括した。責任校正は、情野憲治が担当した。挿図のトレースについては、笹川由紀が担当した。

- 9 文中、挿図記号は、G—グリット、B Y—掘立柱建物跡、D Y—土壙、K Y—溝状遺構、P Y—ピットとして、T Y—柱穴、T N—桶埋設遺構及びF Y—不明遺構として表示した。遺物は、A Z—土器、F—覆土、S—碟を表示した。
- 10 土師器、須恵器に関する調整手法の分類基準は、米沢市埋蔵文化財調査報告書第36集「大浦」を参考にした。分類については、同書に記載したものを参考に若干加筆した。
- 11 本調査区から出土した遺物については、整理、復元したものは米沢市埋蔵文化財資料室（米沢市万世町桑山269-3）に一括保管した。
- 12 本書で使用した遺構番号は、これまでに実施した大浦B遺跡第。次調査から、一部を除き通し番号にした。

本文目次

序文

例言

第Ⅰ節 遺跡の概観と調査の経緯

1 遺跡の立地と環境	1
2 調査に至るまでの経過	1
3 調査の経過	4

第Ⅱ節 検出遺構

1 遺構の概要	6
2 奈良・平安時代の遺構	6
3 中・近世の遺構	9

第Ⅲ節 出土遺物

1 遺物の概要	23
2 奈良・平安時代の遺物	24
3 中・近世の遺物	25

第Ⅳ節 総括

1 大浦B遺跡の遺構	25
2 大浦B遺跡の遺物	26
3まとめ	26

参考文献	27
------------	----

報告書抄録	49
-------------	----

挿図目次

第1図 大浦B遺跡位置図	2
第2図 大浦遺跡群位置図	3
第3図 大浦B遺跡グリット配置図	5
第4図 BY55平面図	10
第5図 遺構平面図(1)	11
第6図 遺構平面図(2)	12
第7図 遺構平面図(3)	13
第8図 DY1116・KY1076・1105・1106平面図	14
第9図 遺構平面図(4)	15
第10図 遺構平面図(5)	16
第11図 ピット群平面図	17

第12図	遺構平面図(6)	18
第13図	遺構平面図(7)	19
第14図	遺構平面図(8)	20
第15図	遺構平面図(9)	21
第16図	遺構平面図(10)	22
第17図	出土遺物実測図(1)	33
第18図	出土遺物実測図(2)	34
第19図	出土遺物実測図(3)	35
第20図	出土遺物実測図(4)	36
第21図	出土須恵器拓影図(1)	37
第22図	出土須恵器拓影図(2)	38
第23図	出土須恵器拓影図(3)	39
第24図	出土須恵器拓影図(4)	40
第25図	出土須恵器拓影図(5)	41
第26図	出土須恵器拓影図(6)	42
第27図	出土須恵器拓影図(7)	43
第28図	出土須恵器拓影図(8)	44
第29図	出土須恵器拓影図(9)	45
第30図	出土須恵器窯道具実測図	46
第31図	出土陶磁器実測図	47
第32図	大浦B遺跡第IV・V期遺構全体図	48

付 表 目 次

第1表	大浦B遺跡出土A群土器分類表(1)	28
第2表	大浦B遺跡出土B群土器分類表(2)	29
第3表	大浦B遺跡出土C・D土器分類表(3)	30
第4表	土器調整手法分類	31
第5表	大浦B遺跡出土土師器編年表・第6表 大浦B遺跡出土須恵器編年表	32

付 図 目 次

- 付図 1 大浦B遺跡第IX次調査区遺構全体図
 付図 2 大浦A・B遺跡遺構全体図

図版目次

- 図版 1 第IX次調査区遺構全景（空中写真）
図版 2 調査区南方部全景（北方から望む）
　　調査区東方部全景（西方から望む）
図版 3 K Y1107プラン確認状況（南方から）
　　K Y1114プラン確認状況（北方から）
図版 4 K Y1115プラン確認状況（東方から）
　　K Y1076プラン確認状況（南東から）
図版 5 調査区南方部全景（北方から望む）
　　調査区南西部全景（北東から望む）
図版 6 D Y1124セクション状況（南方から）
　　調査区北西部調査風景（南西から）
図版 7 T Y1102確認状況（南方から）
　　T Y1103確認状況（南東から）
図版 8 D Y1125半裁状況（南東から）
　　D Y1125完掘状況（南東から）
図版 9 D Y1138半裁状況（南方から）
　　D Y1138完掘状況（南方から）
図版10 K Y1076・1105・1106完掘状況（西南から）
　　K Y1105セクション状況（西から）
図版11 D Y1116遺物出土状況（南方から）
　　D Y1116完掘状況（北東から）
図版12 出土遺物 須恵器高台坏
図版13 出土遺物 須恵器高台坏
図版14 出土遺物 須恵器坏・土師器小形底部（26 a）
図版15 出土遺物 須恵器坏・土師器小形底部（26 b）
図版16 出土遺物 須恵器壺片
図版17 出土遺物 須恵器壺片
図版18 出土遺物 須恵器壺片
図版19 出土遺物 須恵器壺片
図版20 出土遺物 須恵器壺片
図版21 出土遺物 須恵器壺片
図版22 出土遺物 須恵器壺片
図版23 出土遺物 須恵器壺片
図版24 出土遺物 須恵器壺片
図版25 出土遺物 須恵器壺片
図版26 出土遺物 須恵器壺・壺片
図版27 出土遺物 須恵器壺・壺片
図版28 出土遺物 復元須恵器高台坏・蓋
図版29 出土遺物 須恵器窯道具
図版30 出土遺物 須恵器壺底部・珠洲系擂鉢・陶磁器

第Ⅰ節 遺跡の概観と調査の経緯

1 遺跡の立地と環境（第1図）

本遺跡は、米沢市遺跡登録番号J-245であり、米沢市中田町字大浦287番地外に所在する。遺跡の南東約2kmには、米沢市役所があり店舗や住宅地として、年ごとに変容してゆく地域のひとつである。

遺跡は標高236.30mの微高地を中心に分布し、遺跡の南西を堀立川、南東には吾妻山系を源とする最上川、東方を羽黒川が流れ、堀立川と最上川は遺跡の北東直下で合流し、さらに約600m東方地点で羽黒川も最上川に合流する。

微高地の北方にも、西から東に流れる小規模な河川があり、現在は上掘と下掘に分かれているが、両岸には河岸段丘が認められる。このことから、だいぶ以前から流れていたと考えられる小河川である。南東を流れる河川からの高低差は、7mあり一段目は大半が水田で占められる。この地域には、遺跡の存在は確認されていない。

この様に、河川に囲まれた本遺跡群は、今回報告する大浦B遺跡を中心に、東方を大浦C遺跡と呼び、さらに遺跡群の中央を走る県道米沢・浅川・高畠線を境にして、南方箇所を大浦C遺跡と呼んでいる。この外に小河川を境に、北方を大浦D遺跡と呼んでいる。この遺跡は、中・近世を中心であり、大浦遺跡群と呼ぶ場合は大浦A・B・C・D遺跡である。

この各遺跡群の範囲が、郡衙推定域として捉えることが、妥当と考えられている。

2 調査に至るまでの経過（第2図）

大浦遺跡群は、1984年（昭和59年）6月に発見され、大浦C遺跡が最初であり、ここで行われた駐車場造成工事の際に、偶然この現場を車の窓越しに見た埋蔵文化財調査員は、削り取られた面から、遺物が出土している状況を確認した。

遺物は、土師器・須恵器が主体であり、さらにこれらの遺物は溝状遺構に伴うこともわかり早速、新規の遺跡として登録するとともに、関係者との協議し発掘調査を実施した。

調査は、1984年6月15日～同年7月2日の期日で実施し、溝状遺構4基や布目瓦等を検出し、これらの遺物、遺構の大半は奈良時代～平安時代に位置するものであった。この調査を最初として、2003年（平成15年）までに第19次を数える。

確認した溝状遺構は、西方から南方に延び、地形から判断して、A・B・C・Dの4箇所に分けて遺跡分布図に記載した。大浦遺跡群のこれまでの主な調査は、大浦A遺跡が金池第2土地区画事業に伴う緊急発掘調査として、1985年（昭和60年）12月に第2次調査として、実施している。

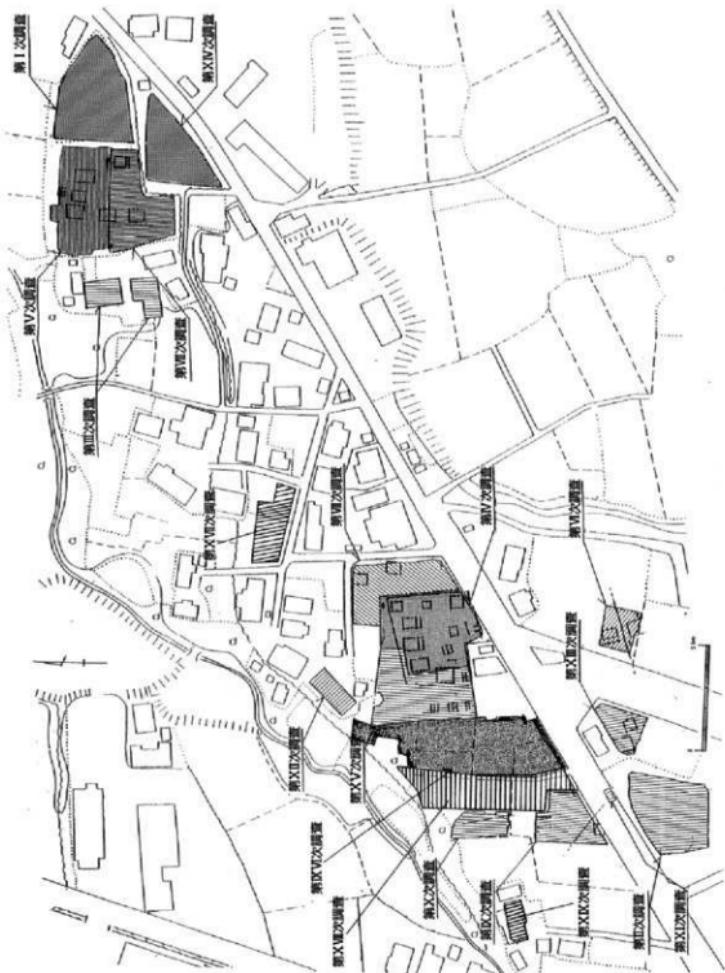
1989年（平成元年）11月には、今回報告書をまとめる大浦B遺跡の第。次調査（大浦遺跡群としては第4次調査）がおこなわれた。その結果、漆紙文書や大型掘立柱建物跡を囲む柵列跡等が確認されたことにより、置賜郡衙の候補地のひとつとして、考えられるようになった。

大浦B遺跡については、第3図で示すように第X次調査まで、おこなわれている。



第1図 大浦B遺跡位置図

第2図 大浦邊群調查所位置図



3 調査の経過

今回の調査は、民間の多目的ホール建設に伴う緊急発掘調査であり、調査対象面積となる約1,200m²のうち遺構・遺物が集中する960m²について調査を実施した。調査区に隣接する東側一帯は、1999年（平成11年）に調査を実施している。この成果については、米沢市埋蔵文化財調査報告書第67集「大浦」大浦B遺跡発掘調査報告書に記載してある。

上記報告書によると、掘立柱建物跡を主要遺構として、これまで不明確であった柵列の西北部コーナの確認等の成果から大浦B遺跡を第Ⅰ期～Ⅴ期に分けて説明している。これらの各時期は、奈良時代～平安時代である。外に中・近世の遺構群も確認されたと報告している。

調査は、2002年（平成14年）5月7日～同年6月10日の期間で実施した。現場の休憩所及び駐車場所は、調査区の東側を土地所有者のご好意により借用した。

調査開始日の5月7日は、曇りのち小雨の天候の中重機による表土剥離を実施した。その際に表土の土から遺物を一袋採集した。表土剥離作業は、次の日の8日までの2日間で終了した。調査区の北端から面整理を開始し、平行してグリット杭打ち作業も実施した。この日は前日と同様な天候であった。5月9日は、曇りであった。前日に続いて杭打ち作業を実施し、合計21本を打ち込み終了した。隣接する東側は、調査がすでに終了している箇所であり、今回の調査区に延びる遺構もあることから重複するように、遺構確認面まで掘り下げた。

5月10日は、晴れのち曇りの天候で経過し、前日から進めていた東側調査との重複箇所について、作業を終了した。調査区の北部からは、中・近世と考えられる遺物の出土が見られた。

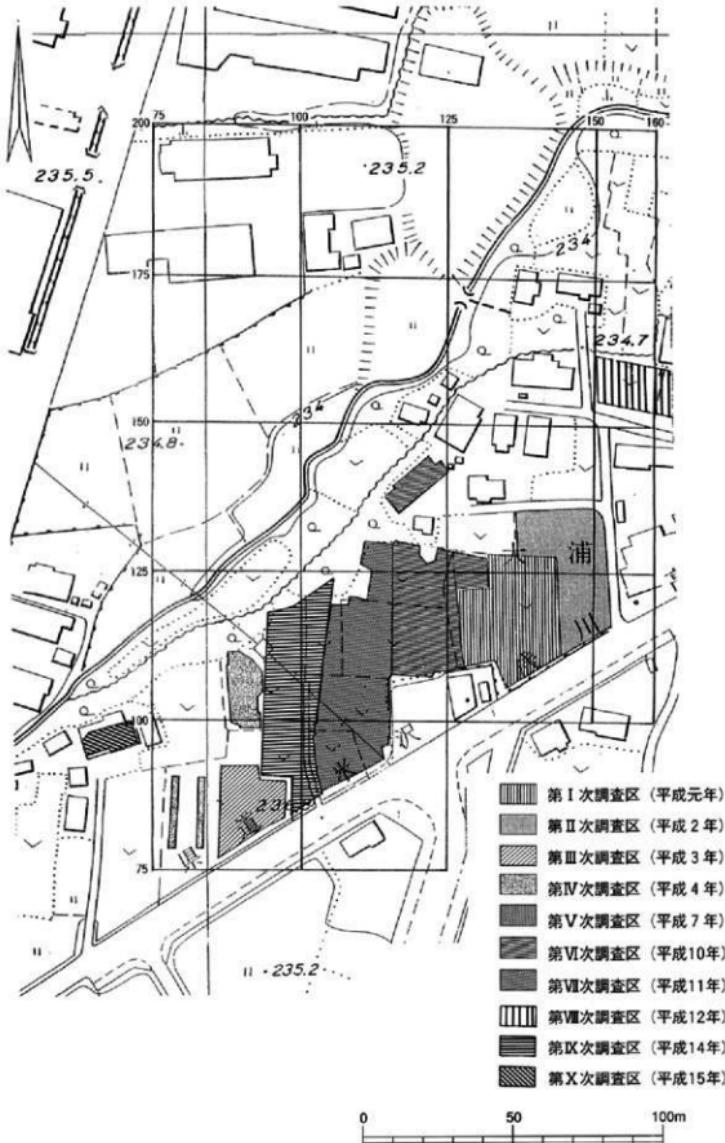
5月13日は、調査を開始してから始めて、一日中晴れで経過した。出土遺物は、主に須恵器片や土師器片であり、小片以外は番号をつけて、出土点を記入してからとりあげた。ただし、遺構に関連する遺物は、遺構番号で取り上げることにした。

5月14日も晴れであったが、風が強い一日であった。遺構確認面までの掘り下げを中心に作業を進めた。5月15日も晴れであり、調査区中央箇所に南北に延びる溝状遺構を確認した。

5月16日も晴れであった。調査区の西南箇所には、水田があり、調査区との境の壁から水が漏れてくることから、壁を厚くして水の浸入を防いだ。5月17日は朝から雨降りであったが、遺構の確認には良い機会なので、調査区南端から遺構確認に取り掛かったが、雨が強くなり午前10時には、現場作業を中止した。その後、資料室に引き上げ遺物の洗浄を実施した。

5月20日は、うす曇の天候で経過した。調査区中央部に広がる黒褐色土は、意外にも多くの遺物を含んでいた。5月21日もうす曇で経過し、溝状遺構を中心に確認した。これらの遺構は、いずれも浅い形状を呈するものであった。

5月22日は、晴れで経過した。この日から、遺構掘り下げを開始した。当初、予想した様に浅い形態であった。5月23日は、晴れのちうす曇の一日前で、大型の土壙についても掘り下げを開始した。5月24日は、晴れであったが、雷が鳴った。この日も遺構掘り下げを実施した。5月27日は午前中、うす曇で経過したが、午後から雨が降り出しさらに雷も鳴り出し、3時頃には米沢市埋蔵文化財収蔵室へ移動して、遺物洗浄を実施した。5月28日～6月10までは天候に恵まれ、今回の調査を終了した。



第3図 大浦B遺跡グリッド配置図

第Ⅱ節 検出遺構

1 遺構の概要

第IX次調査区からは、土壤（D Y）29基、溝状遺構（K Y）12基、柱穴（T Y）3基、ピット（P）170基、桶埋設遺構（T N）4基、不明遺構5基の総計223基が検出された。これらの遺構群は、表土した30~60cmで検出され調査区の南方で30cm、北方に行くに従って深くなり北方端部で最深の60cmであった。これは、地形的に南から北方へ緩やかに傾斜しており、これに相応する形で土砂が堆積した結果と考えられる。

分布状況は、調査区の中央部から北方にかけて集中しており、南方及び南西部は遺構がまばらで特に南西部はピットが数基確認されただけであった。この地域の遺構群は、覆土や遺構の形状から近世の時期に位置すると考えられる。

土壤は、方形や円形の平面形状を呈し、断面形態がレンズ状で浅いものが大半を占める。覆土は、自然堆積が多く認められ、覆土に含む遺物は少量であった。年代的には、奈良・平安期の土壤と中・近世期の土壤に分けられ、奈良・平安期の土壤は遺物を少量ながら含むが、中・近世期は殆ど遺物を含まないのが特徴であった。

溝状遺構も土壤と同様に浅い形態が大半であったが、調査区の北端部で検出した近世の溝状遺構は、唯一深い形態であった。溝状遺構の中には、東側に隣接する大浦B遺跡第VII次調査区から続くものもあった。

柱穴の2基は、大浦B遺跡第VII次調査で検出したB Y55を構成する北西部の柱穴であった。今回の調査により、B Y55のすべての柱穴を検出したことになる。

ピットは、中・近世期の掘立柱建物を構成する遺構と考えられるが、今回検出したピット群については関連を見出すことができなかった。

桶埋設遺構は、検出状況から判断して明らかに近・現代の遺構である。今回の調査区は、農道及び畑であり、桶埋設遺構が農道に隣接するように構築されていた。人糞を畑の肥料として使用するために、貯蔵する施設である。通称「タメ桶」と呼び、畑や果樹園に見られたが最近は姿を消した農業施設である。古くなった風呂桶を再利用して埋設し、この施設を構築するのが多かった。

不明遺構とした5基は、近・現代に掘られたと考えられる遺構である。形状は、方形や不整形円形を呈し、覆土は人工堆積状況を示す。F Y1310・1311は、プラン上面にビニール等が認められ、明らかに現代の遺構であることから掘り下げは実施しなかった。次に各遺構の詳細について、時期別に分けて説明する。

2 奈良・平安時代の遺構

この時期に位置する遺構群は、柱穴2基、土壤14基、溝状遺構9基、ピット8基の合計33基の遺構群を検出した。列挙した順に従い、以下に述べる。

○柱穴（第4図）

T Y1102・1103の2基であり、調査区の北東部から検出された。大浦B遺跡第VII次調査区で検出したB Y55を構成する柱穴で、T Y1102はほぼ円形を有する掘り方である。長径は、54cm、

短径は48cm、深さは30cmであった。セクション図で示した砂目のスクリーン箇所は、柱痕である。直径12cm位であることから小規模な掘立建物であったことがうかがえる。T Y1103は長円形の掘り方で、長径は68cm、短径は48cm、深さは28cmとT Y1102と同様である。柱痕も同様であり、柱の直径も同様であったと推定される。

B Y55は、桁行東西3間(1.8m×1.45m×1.8m)、梁行南北2間(2.1m×2.1m)の掘立建物跡であることが、今回の調査で明らかになった。時期は、大浦遺跡群の、期に相当する。

この時期は、官衙としての機能を失った直後に構築された遺構群であり、今回の調査区東側に隣接する第VI・VII次調査区からは、6棟の掘立柱建物跡が検出されている。

○土壙（第5図～第9図・第11図～第14図）

D Y1116・1119～1127・1130・1133～1135・1137・1138・1140の17基が検出された。各土壙群は、覆土や伴出遺物等の吟味からB Y55に併行する土壙群と推測した。機能としては、官衙が移転する際に生じた廃棄物を捨てるために構築した土壙群と考えられる。

調査区の中央を、南北に延びるK Y1107に隣接及び重複する土壙は、大型形状の形態が多く認められた。今回出土した遺物の大半がこれらの土壙群からであり、特にD Y1116・1124が最も出土数が多かった。

平面形状からA～B類の3形態に分類できる。

A類—大型の方形状で掘り方も深く、遺物を多く含む土壙群である。D Y1116・1124・1137の3基が認められた。D Y1116からは、遺物挿図で示した7の須恵器高台坏、10の須恵器坏、28・34・44・47・74の須恵器壺片のほかに土師器坏、土師器壺片、内黒土師器、焼成を受けた粘土が出土している。最も多い器形は須恵器壺片であり、図示した以外にも51点が出土している。

D Y1124は、調査区の中央やや北方に位置し、K Y1124が西側にK Y1107・1109が東側に付随する。出土遺物は、遺物挿図11・16の須恵器坏、35・40・55の須恵器壺片のほかに土師器壺片、内黒土師器坏、土師器両黑坏、須恵器壺、須恵器蓋があるが、小破片であった。

D Y1137は、3基のなかでは最も南に位置し少し高いところにあることから、上面が削平された状況であった。底面中央部を南北にK Y1107が縦断している。遺物挿図3の須恵器高台坏、20～22の須恵器坏、25の須恵器蓋、26の土師器小型土器、53・58の須恵器壺片が出土している。

3基の土壙から出土した遺物は、器形や調整法から8世紀後半～9世紀初頭に併行する。これはB Y55と同時期に構築された土壙と言える。

B類—大型で円形状を呈する土壙群で、浅いのが特徴である。D Y1120・1122・1123の3基が認められた。D Y1120は1122と重複して構築している。挿図49・62の須恵器壺片の他に土師器片が出土しているが、磨滅が著しい小破片であった。D Y1123からは、挿図56の須恵器破片を始め須恵器坏の破片が出土している。底面のピット群は、覆土の観察から土壙に伴うものではなく、近世のピット群である。

これら3基の年代は、伴出遺物からA類と同様と考えられる。機能としては、極端に浅い形態であるため不明である。

C類—円形や椭円形を有する小形の土壙群で、深さは8cm～30cmを測る。覆土からの遺物は、

小量であり、破片で占められる。土壙群としては、D Y1119・1121・1125～1127・1130・1133～1135・1138・1140の11基が検出された。

D Y1138からは、遺物挿図18の須恵器坏が出土している。D Y1119からも遺物挿図48の須恵器壺片が出土している。実測図及び拓影図を作成できたのは、この2点だけであった。外は磨減が著しい小破片であり、器形としては土師器坏や土師器壺形土器であった。

覆土の土色や出土遺物から、推測されるA・B類と同様な年代が考えられる。機能的には、A類に関連する施設として、構築された土壙群であろう。

○溝状造構（付図1・第5図～第12図・第16図）

奈良・平安時代の溝状造構は、K Y1106～1113・1115の9基が検出された。南北に延びるK Y1107・1111・1112を除き他の溝状造構は東西に延びる分布状況を呈する。K Y1107は北方からやや東よりに南方に延び、調査区東南で不明確になっている。これは、確認面が畑の耕作によってすでに削平されたことによるもので、本来は東南方向に延びるものと推測される。

K Y1106は、調査区の北東に位置し北側に大形のK Y1105、南側に東方から延びてくるK Y1076に挟まれた箇所にある。大形のK Y1105は、近世の溝状造構である。南側の溝状造構は、近世の溝状造構である。第16図で示すように底面は平坦で、南側の壁面は緩やかに対して、北側壁面は急勾配に立ち上がる形態で、深さは20cm、幅は60cmあった。東方は、後世に削平され、確認することができなかった。

覆土からは、土師器壺片6点を始め須恵器坏片、須恵器壺片各1点が出土しているが、どれも小破片であった。遺物は流れこんだ様相を呈し、特に土師器壺片摩滅が著しかった。

K Y1107は、今回の調査区で最長の長さを有し、幅は60～80cm、深さは最深で20cmあり、南方に行くに従がって浅くなる。第7図で示したように底面は、平坦で壁は緩やかに立ち上がる。

遺物は、覆土が深い北方箇所を中心に出土し、第23図42、第25図51・54、第27図59、第28図66の須恵器壺片については、拓影図を作成した。他に内黒土師器坏5点、土師器坏7点、土師器壺片21点、須恵器坏6点、須恵器壺片23点であった。

調査区の低い箇所を選定して構築しており、また外の溝状造構が交差することから判断して、この溝状造構は排水路と考えられる。年代は覆土の土色や出土遺物から、B Y55と併行するものと判断され、9世紀初頭の造構と推測される。

K Y1108は、D Y1124の西方に延びる溝状造構で、幅40cm、深さ20cmを有する。高低差から判断すると、西から東へ流れ、前述した土壙のD Y1124に貯まる形態である。第9図からわかるように、西方に延びる様相を呈している。底面は平坦で壁面はやや急勾配に立ち上がる。覆土からは、土師器坏1点、土師器壺片4点、須恵器坏1点、須恵器壺片1点が出土しているが、小破片で図示するまでにはいたらなかった。年代は、覆土や出土遺物からIV期の造構と推測される。

K Y1109は、D Y1126の西方から延びK Y1107に接合する。土壙のD Y1126からは、第17図1の須恵器稜碗が出土しており、8世紀中葉の土壙である。第6図は、K Y1107を掘り込んでいる様に見えるが、覆土の吟味から同一時期と考えられる。底面から土師器坏の小破片が1点出土している。

K Y1110・1111・1112の3基は、「L」字状に構築され、東西に延びるK Y1110、南北に重複して延びるK Y1111・1112で構成される。この様な形態の溝状遺構は、建物跡に伴うものと推測されるが、付近に中近世の柱穴しか見当たらないことから、建物跡に伴うものではないと考えられる。

70~90cmと幅は広いが、深さはK Y1110・1111とも9cmと浅い形態である。K Y1112の深さは、19cmあり、K Y1111を掘り込んで構築している。第12図に示したのが遺物出土状況であり、K Y1112からは、第18図15や第19図23の須恵器壺が出土している。東西方向のK Y1110からは、土師器壺片4点、須恵器壺片2点、K Y1111からは、土師器壺6点、内黒土師器壺1点、土師器壺片6点、土師器蓋1点、須恵器壺片2点が出土している。

覆土や出土遺物から前述した溝状遺構群と同時期と考えられる。第5図のK Y1113も同様な時期であり、幅は67cm、深さは4cmと浅い溝状遺構である。

K Y1115は、調査区の南方に位置し、東西に延びる。幅は55cm、深さは8cmと浅く東側端が少し南方に延びる。底面は平坦で、断面形態は、レンズ状を呈し、覆土からは土師器壺3点、須恵器壺1点が出土しているが、小破片で占められる。第10図から分かるように周囲に関連する奈良・平安の遺構群ではなく、構築の目的は不明である。

その外の奈良・平安の遺構としては、第6図のP 1211がある。長径76cmの掘り方を有し、柱痕跡が認められた。B Y55の西南4mの位置に構築されていることから、この掘立柱建物跡に関連する遺構と考えられる。

○中・近世の遺構

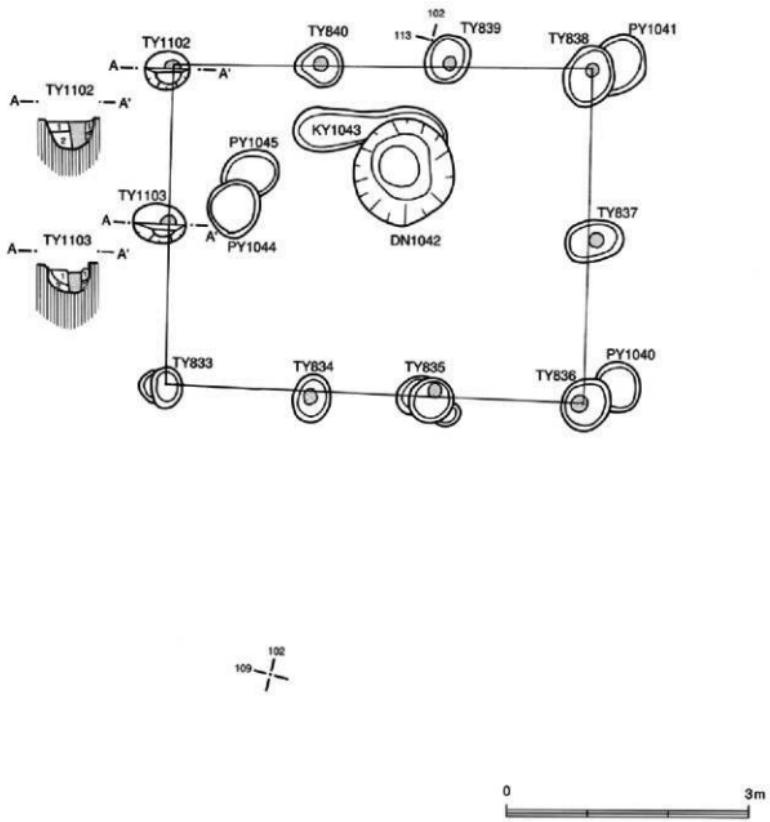
今回の調査区からは、土壙14基を始め、溝状遺構5基さらに柱穴164基が検出された。他に不明遺構5基と桶理設遺構4基がある。この二形態の遺構については、前述した理由により割愛する。

奈良・平安の遺構と中・近世遺構の相違は、出土する遺物は勿論であるが他に覆土の土色が挙げられる。覆土の土色は、奈良・平安が黒褐色であるのに対して、中・近世は茶褐色が主流で土質も軟質である特徴がある。

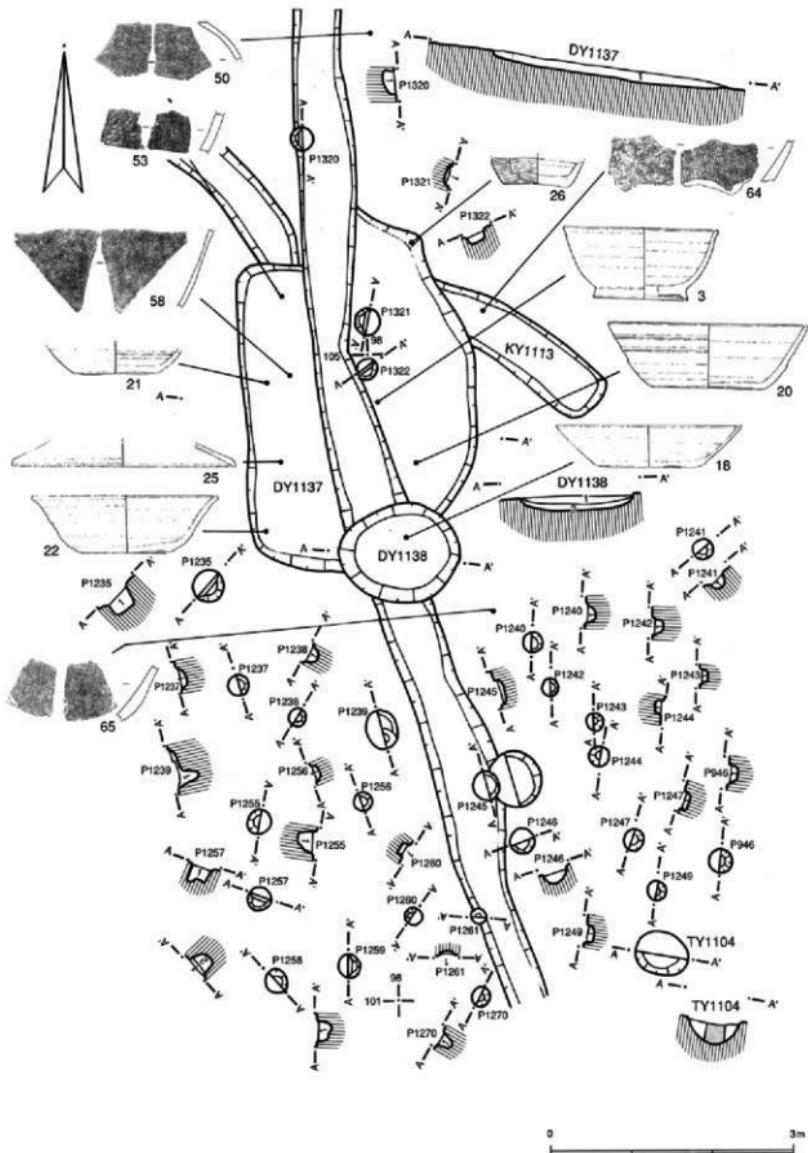
柱穴の掘り方についても、奈良・平安時代は大形形状であり、中・近世は小規模になってゆく傾向が認められる。掘り方も浅くなり、掘り方と柱痕跡の判別が困難なものが大半であった。検出した柱穴は、掘立柱建物を構成すると考えられるが、掘立柱建物跡を明確に把握するには至らなかったので、柱穴の略号であるT Yは用いず、小さい穴の略号Pを使用した。以下に中・近世の遺構群について、土壙・溝状遺構・柱穴の順で説明したい。

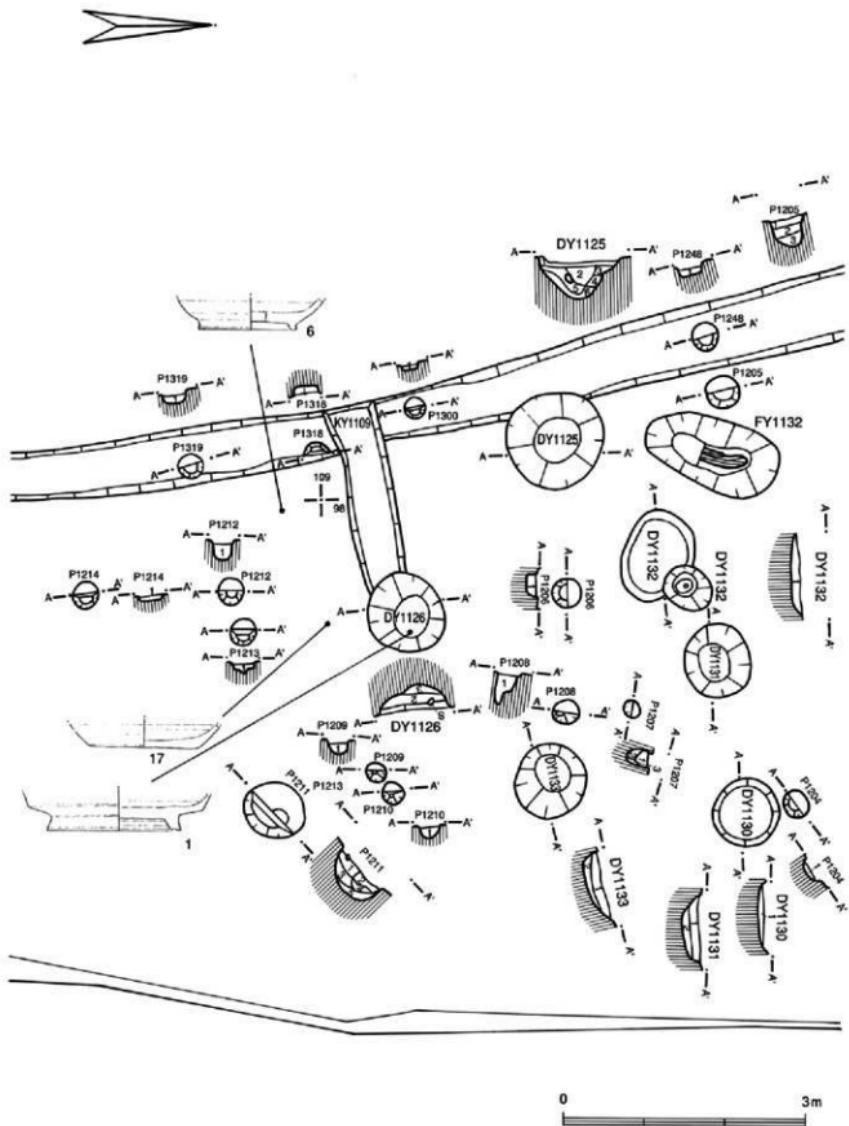
平面形状が橢円形状を有する形態と円形状の形態の二形態に分けられる。両方とも掘り方は浅く最深でも、D Y1131の22cmであった。土壙出土の遺物としては、ほとんど認められなかつたが、D Y1119から第24図48の須恵器壺片が出土している。この遺物は、後世に流れこんだものであり土壙の年代を示すものではない。

橢円形状の土壙は、D Y1117・1118・1119・1128・1129・1132・1142・1143の8基がある。分布状況を見てみると、調査区の中央を堺に南北に集中して構築されている。ピット群の分布と一致することから、掘立柱建物に関連する土壙群と考えられる。土壙群やピット群が深いのは、上部が耕作等によって削平された痕跡を呈している。

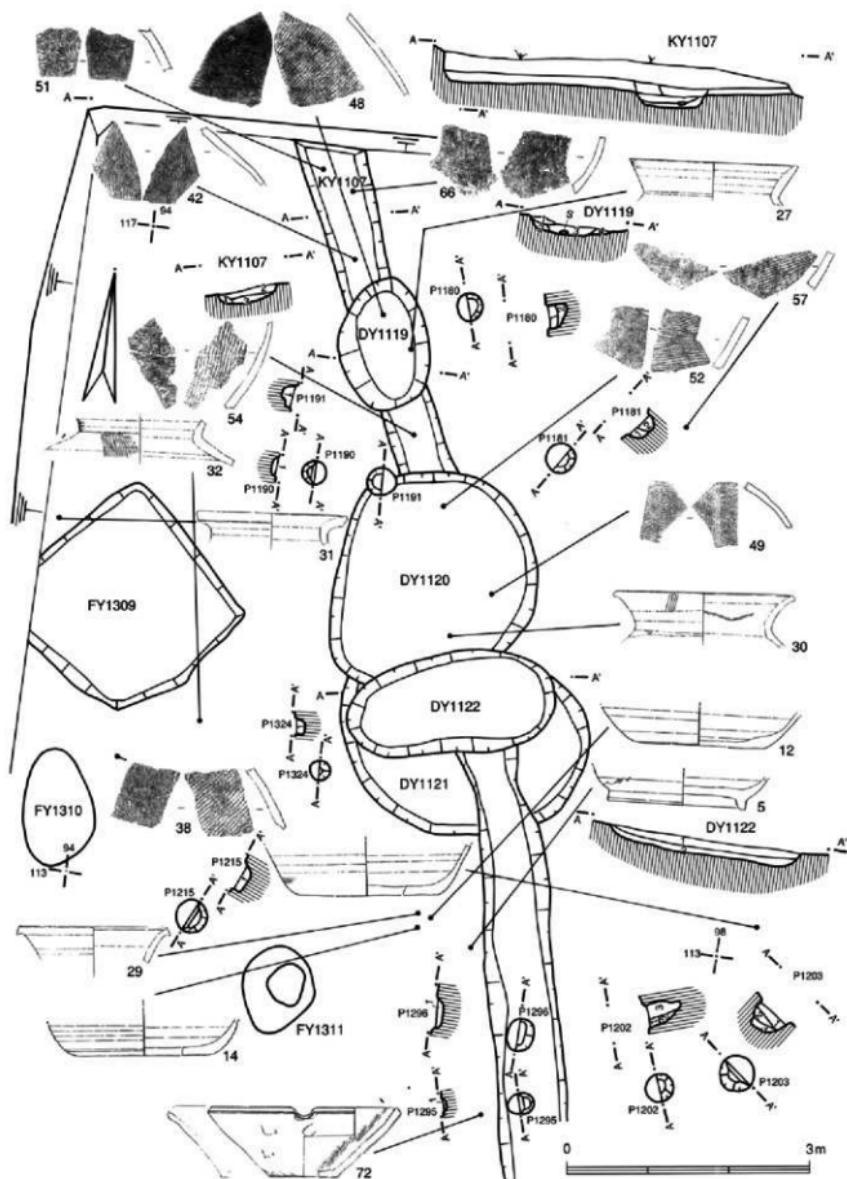


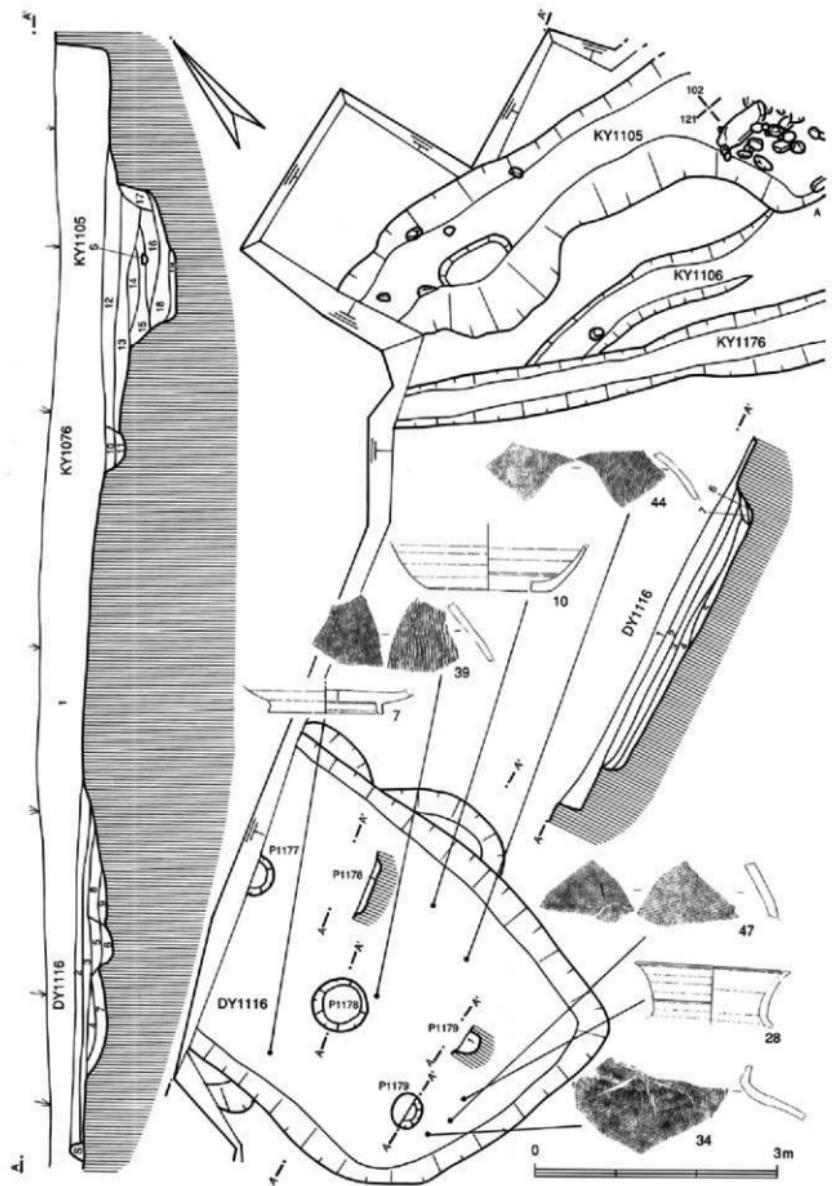
第4図 大浦B遺跡第IX次調査 B Y55平面図



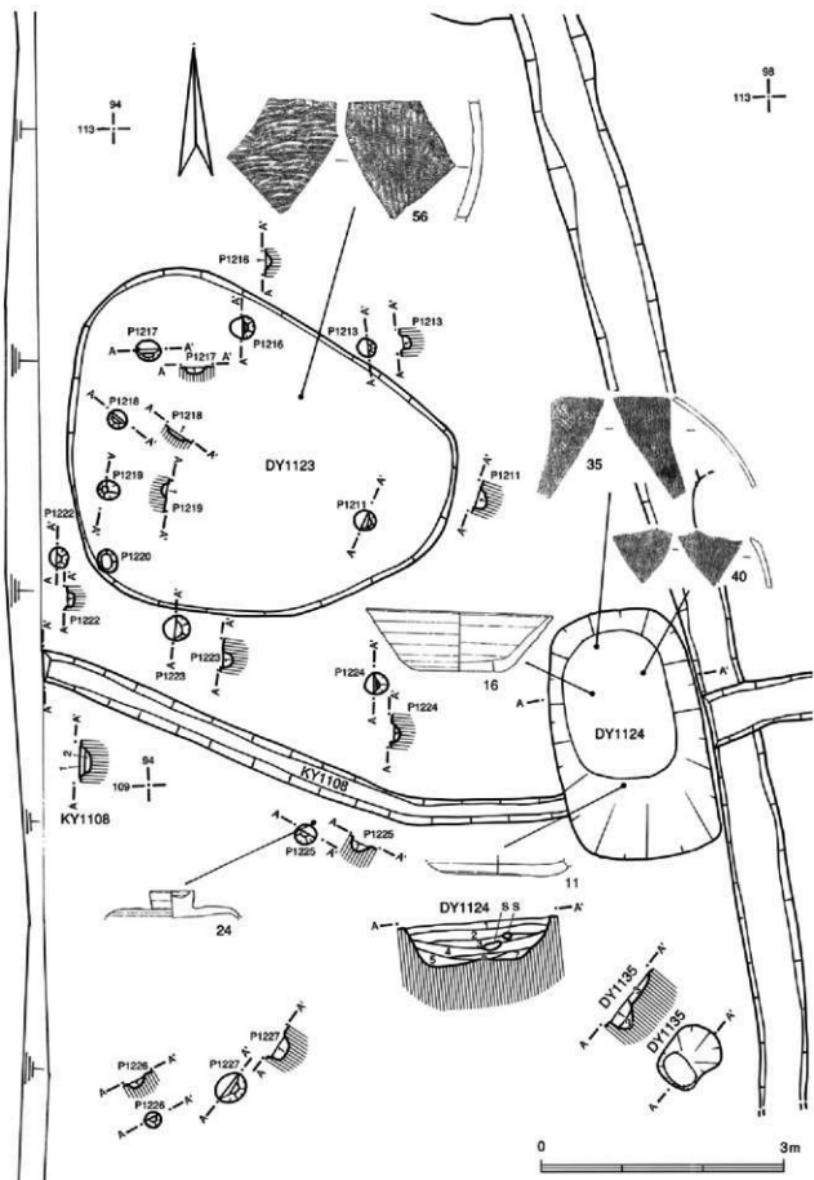


第6図 大浦B遺跡第IX次調査 遺構平面図(2)

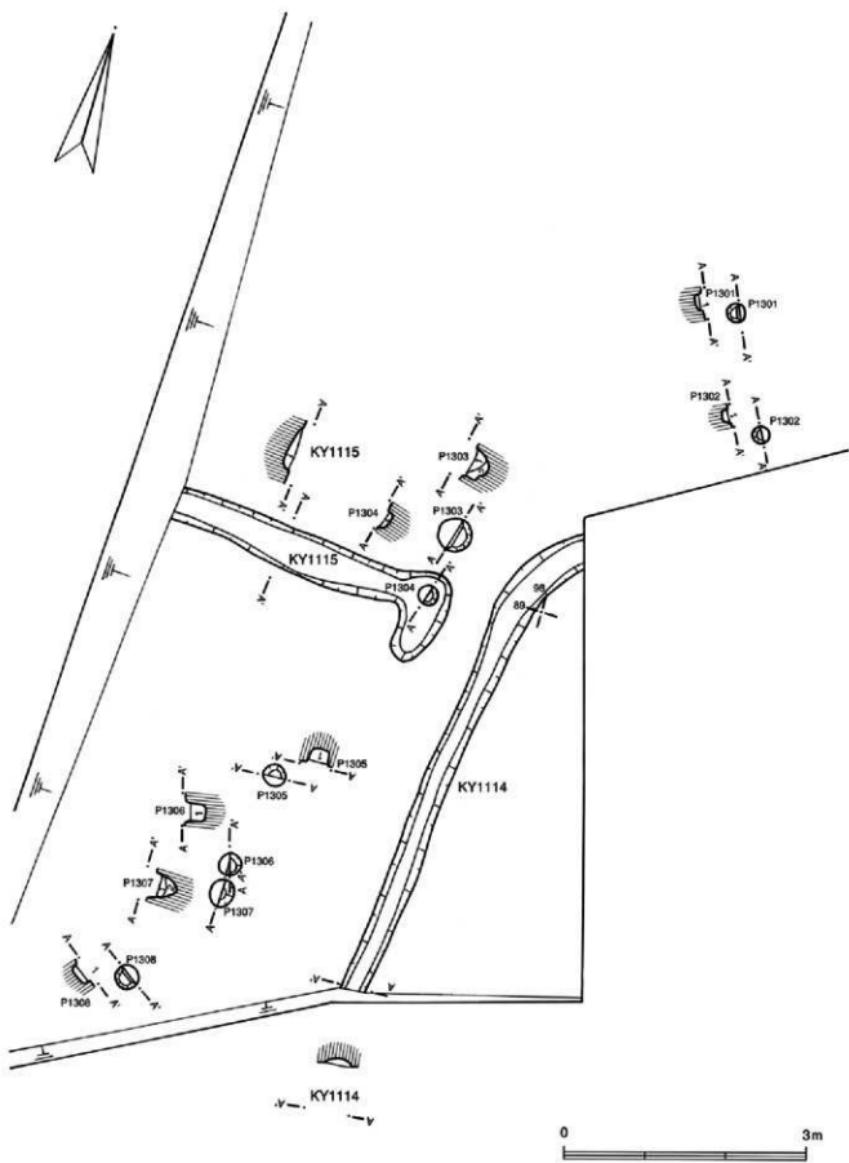




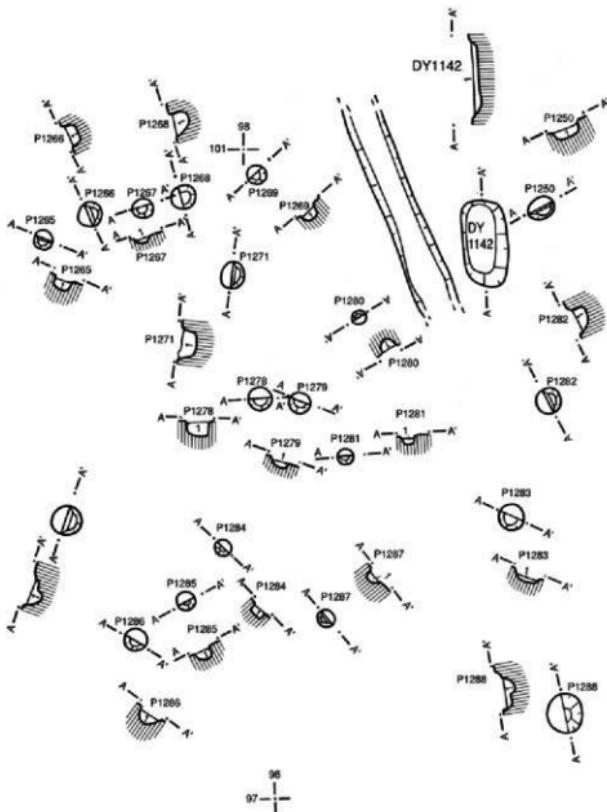
第8図 大浦B遺跡第IX次調査 遺構平面図(4)



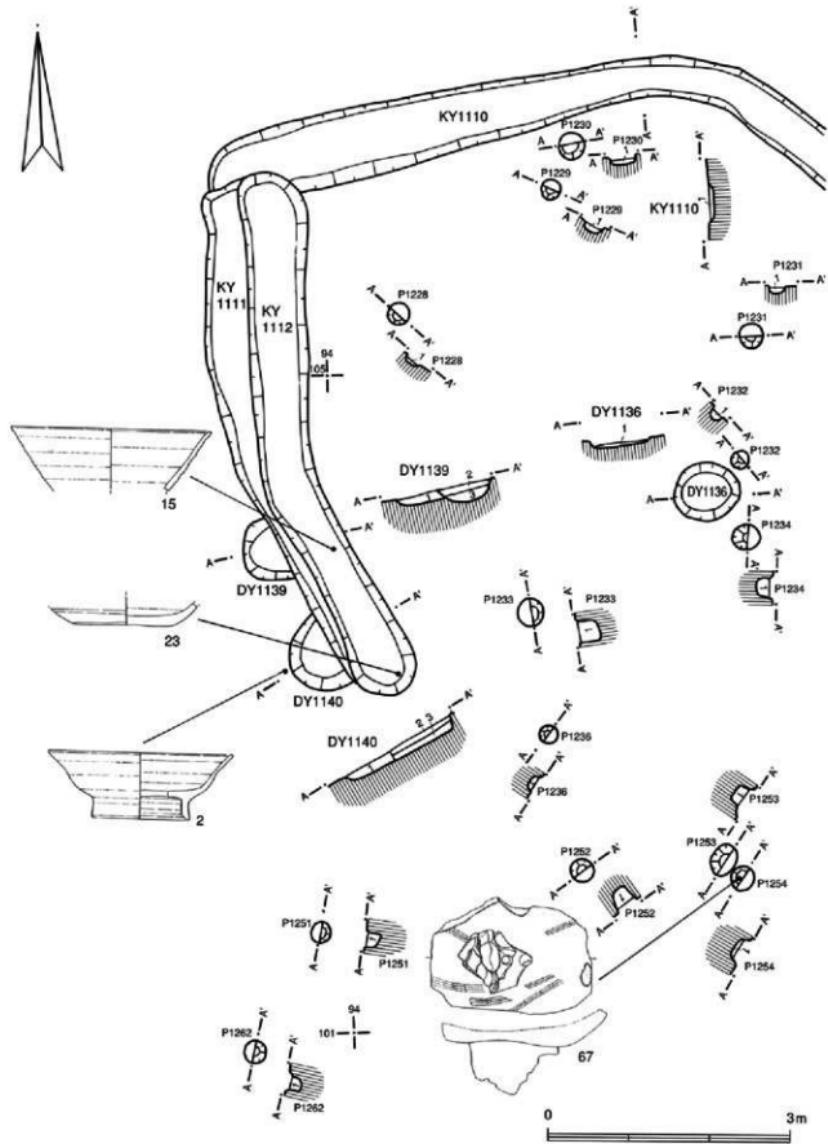
第9図 大浦B遺跡第IX次調査 遺構平面図(5)



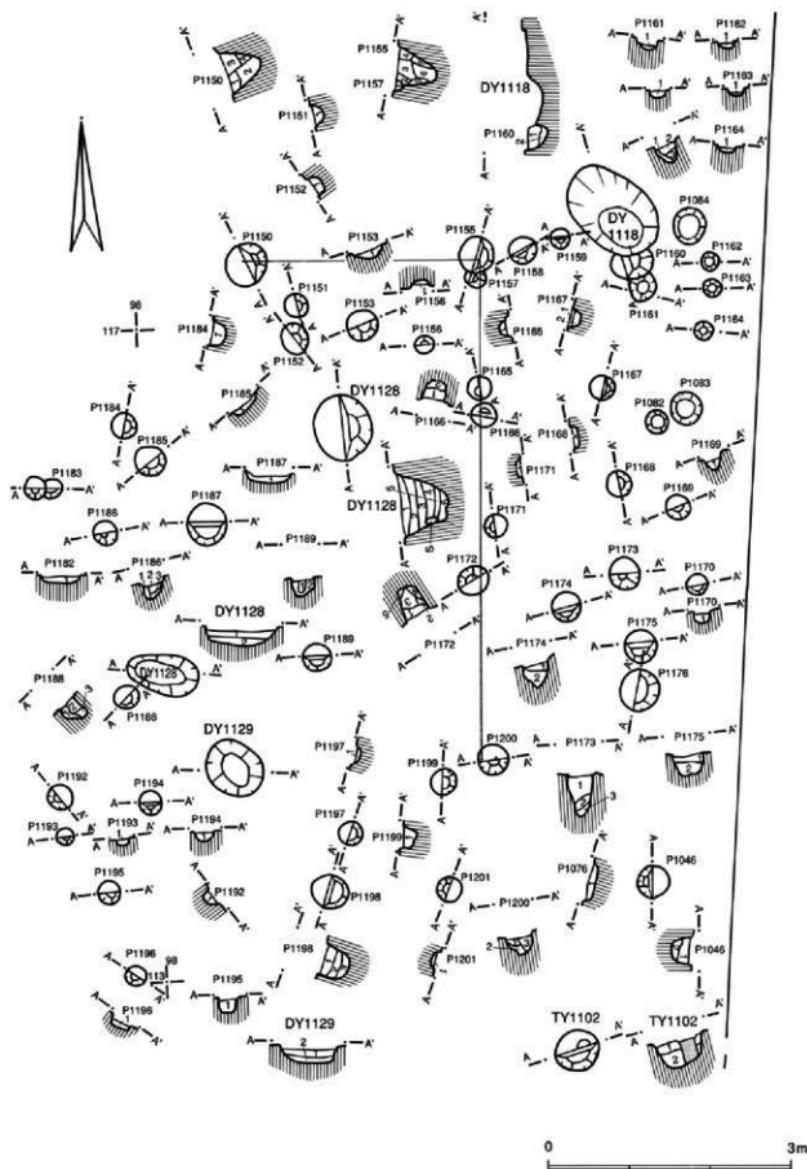
第10図 大浦B遺跡第IX次調査 遺構平面図(6)



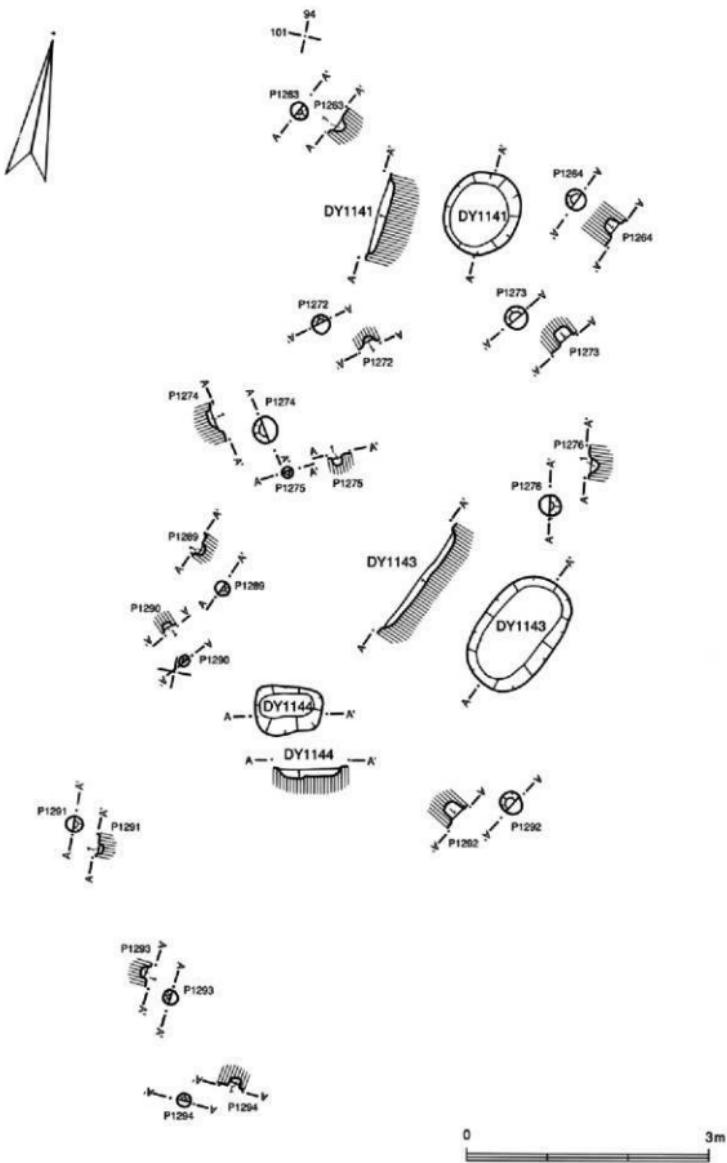
第11図 大浦B遺跡第IX次調査 遺構平面図(7)



第12図 大浦B遺跡第IX次調査 遺構平面図(8)



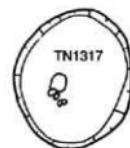
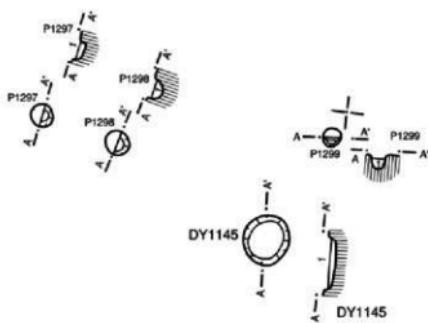
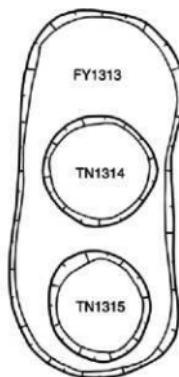
第13図 大浦B遺跡第IX次調査 遺構平面図(9)



第14図 大浦B遺跡第IX次調査 遺構平面図(10)

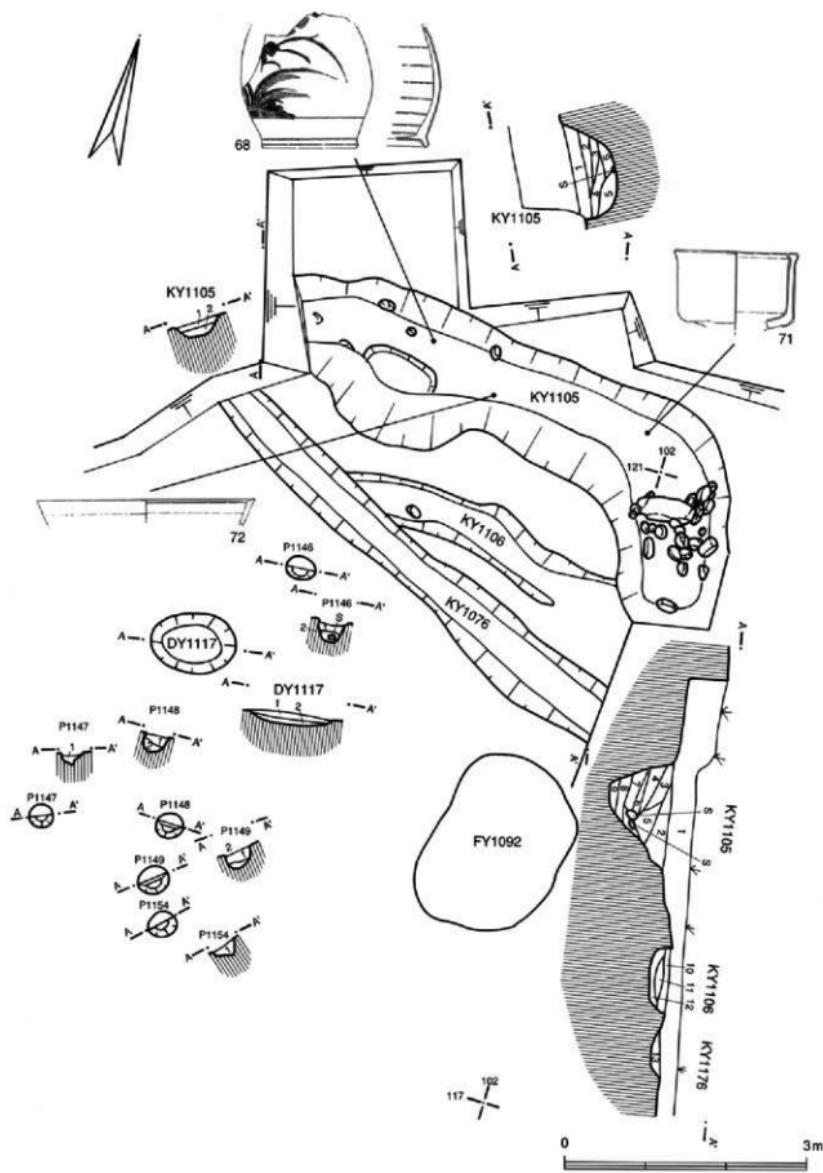


98
07



0 3m

第15図 大浦B遺跡第IX次調査 遺構平面図(11)



第16図 大浦B遺跡第IX次調査 遺構平面図(12)

円形状の土壙としては、D Y1131・1136・1139・1141・1144・1145の6基で、先に述べた梢円形状と分布も同様である。構築の目的も掘立柱建物に関連するものと推測される。

溝状遺構としては、4基検出された。調査区の北方端部に位置するK Y1076・1106は、並行して構築され、K Y1076は幅60~80cm深さは最深で20cmある。この溝状遺構は、東方の大浦B遺跡第VII次調査区から続くもので、総延長は23mを有する。壁面は緩やかに立て上がり、底面は平坦である。覆土に微砂を含むことから、水が流れていたと推測され、東から西へ流れ遺跡の北端部を流れる小河川に合流すると判断される。遺物は、出土しなかった。

K Y1105は、大形の溝状遺構であり、幅は1.3m~1.9mある。第16図は、平面図であり、最大幅を有する底面には、長径95cmの梢円形状の掘り方が認められた。南方に直角に曲がりそこで終わる形態である。その曲がった箇所には壁面を補強する為の大形の礫と小形の礫が配してあった。

この溝状遺構は、水を引き込む為に構築された施設であり、出土遺物から17世紀中葉頃の年代に機能していたと考えられる。西南に位置するピット群の中には、この時期に併行する建物を構築していた痕跡を示している。遺物としては、第31図の68~71の陶磁器類が覆土から出土した。

K Y1114は調査区の南端に位置し、東方から南方に曲がる形態の溝状遺構である。第10図で示す様に断面形態がレンズ状で浅く、遺物は出土しなかった。周辺に関連する遺構群は認められないことから、構築目的については不明である。

柱穴は調査区の中央及び北方を中心に164基検出された。これらの中で掘り方や覆土の観察から第13図で示したP 1150・1155・1166・1172・1200の5基については、関連性が認められたが、掘立柱建物跡を構成するまでには至らなかった。珠洲系の擂鉢第26図72が出土しており、これらの柱穴群は中世の年代が推測される。この外にP 1173・1198・1186・1188の4基についても同様な時期と考えられる。

外の155基については、中世以降の年代が想定される。柱穴の規模からすれば小規模な掘立柱建物であったと考えられる。

第三節 出土遺物

1 遺物の概要

大浦B遺跡第IX次調査区からは、整理箱で8箱の量であった。点数としては、土師器坏片76点内黒土師器坏片120点、高台坏内黒土師器片2点、両黒土師器坏1点、土師器甕片748点、土師器蓋片1点となる。須恵器としては、須恵器坏片53点、須恵器甕片384点、須恵器壺片18点、須恵器蓋片5点である。外に窯道具1点が出土した。

中・近世の遺物としては、陶磁器片42点、擂鉢片5点がある。外に鉄製品4点があるが小破片であり、器種を特定することができなかった。

遺物の出土地点は、調査区の中央から北方にかけて多く出土しており、遺構の分布と比例している。遺構に伴うものが大半で、特に南北に延びるK Y1107及び重複する遺構群からの出土状況であった。出土した遺物は、土師器、須恵器の奈良・平安時代の遺物と陶磁器・擂鉢の中・近世の遺物に大別される。実測図や拓影図を作成した74点について、細別を加え以下に述べる。

2 奈良・平安時代の遺物

大浦B遺跡出土の遺物については、これまでの報告書の中で作成した分類表に沿って細別を加えた。器種の分類については、第1～3表、土器の調整については第4表、編年については第5・6表に参照として表記した。

出土した遺物は、土師器（A群土器）と須恵器（B群土器）に大別される。大浦B遺跡出土のA群土器は第1表で示すように1類～12類の形態に細別でき、これまでの調査の成果によって第5表の年代が想定している。

今回の調査区からは、第19図26の小形土師器壺底部がある。他は実測図を作成するまで至らなかつたが、底部や口縁部から器形を復元するとA群5a・5b類の2形態が認められた。

この形態は、底部が広く器高が低い器形である。内面は横位のミガキ、外面は底辺部を回転ヘラケズリを施している。底部は第4表の土器調整手法分類表に示した、3) 底部切り離し分類Bの回転ヘラ切り同ヘラケズリ調整で成形している。大浦B遺跡II期に相当する土師器壺であり、8世紀中葉～8世紀末葉に位置づけられる。

須恵器は、第17図1～3、第18図16、第19図18・20・22・24・25の9点について器形が把握できた。これらは、8世紀中葉～9世紀後半の年代が想定される。

8世紀中葉～8世紀後半の形態としては、B群10a類の第17図1とB群3類の第19図18・B群5類の第19図20・22の4点が認められた。第17図1は、胴部に回転ヘラケズリによって、成形した稜線を有するのが特徴で、一般に「稜塊」と呼ばれている高台壺である。稜塊も細かな特徴から、大形の10a類、小形の10b類に分けられる。本群はII期の前半、もしくはII期後半に出現したものと見られ、本市においては笹原遺跡に出土例がある。

B群3類は、第19図18で器高の低いのが特徴である。底部は、回転ヘラ切り無調整で成形している壺である。同図20・22はB群5類の形態で、底部径に対して口径の比が高い器形である。

8世紀末葉の器形としては、第17図2・3がある。B群11類の高台壺で口縁部が外反する成形である。須恵器蓋（D群土器）の第19図24・25についても摘み部の形態と肩が張る器形から、8世紀末葉～9世紀初頭のD群3類に細類した。今回の調査区の東方に位置する、第VII次調査区で出土したD群土器の中で最も多く認められた器形である。

9世紀中葉～9世紀後半としては、第18図16が出土している。B群9類で大浦B遺跡のI期に位置づけられる。底部は、欠損しているため不明であるが回転糸引き無調整と考えられる。器形は、口径に対して底部が狭いのが特徴である。

須恵器壺は口縁部8点、底部1点の他は胴部の破片で占められる。叩き目は・押え目の分類については、第4表の4)に示した。これらは、須恵器壺の年代に併行すると考えられ、8世紀中葉～9世紀初頭の須恵器壺で、第20図～29図に実測図及び拓影図を作成した。

第20図は、口縁部で31のように「く」の字形に曲がる形態と27～30の緩やかに外反する形態に大別される。第29図74は須恵器壺の底部で平底の形態である。横位や斜位の板目状の叩き目と横位のカキメで成形している。内面は、半同心円の押え目が認められる。

第30図は、須恵器焼成窯の窯道具である焼台である。調査区の中央やや南よりのP1254覆土

から出土している。須恵器甕の胴部片の外側に粘土を貼付して、成形した焼台である。窯場としては川西町との境に位置する大神窯跡や壇山窯跡が考えられる。本来、窯場で使用するものがなぜ集落に持ち込まれたかは不明である。以上が奈良・平安時代の出土遺物であった。次に中・近世の遺物について述べる。

中世の遺物としては、第26図72の珠洲系陶器播鉢で、北方の柱穴が集中する地点から出土している。片口を有する形態で、口径28cm、底部10cm、器高は、10cmである。播鉢の機能よりも鉢としての用途を示す様相を呈している。内面に緑色の自然釉が付着している。

近世の遺物は、大形溝状遺構のK Y1105を中心に出土した。第31図が近世の遺物であり、17世紀頃の陶磁器類で占められる。68は瓶で植物絵を染付けしている。釉の観察から伊万里焼と推測される。69も伊万里焼と考えられ、飯碗である。70は黄瀬戸の小鉢であり、口縁部に灰釉を施している。71はなまこ釉を両面に施した小形の鉢で、口縁部が直立する器形である。73は播鉢の口縁部であり、68・71と同様にK Y1105から出土している。器形の特徴から美濃系の播鉢と考えられる。

第IV節 総括

1 大浦B遺跡の遺構

平成元年の第1次調査から平成14年度までの長期間に亘ってその都度、発掘調査が実施されてきた。ここでは、14年間の18回に及ぶ大浦遺跡群の概要を述べ、今回の遺構群との係わりを吟味したい。

大浦遺跡群は、第2図で示すように東西約400m、南北約100~150mの範囲に遺構が検出された。これらの遺構群は、奈良・平安時代と中・近世に大別される。奈良・平安時代はI期~V期に細別できる。

I期は、8世紀前半8世紀中葉期である。大浦B遺跡第I・II次の調査区東方から4棟、第15次調査区北方から1棟の合計5棟の竪穴住居跡である。これらの住居跡は、埋め立てられ覆土に殆んど遺物は認められなかった。これらの状況から判断して、II期の官衙建設に伴って強制的に移転させられた結果と考えられる。出土遺物としては、土師器のA群1類土器が併行する。

II期の遺構（8世紀中葉~8世紀末葉）

南に4脚門を配し、東西41.5m×南北38.4mの柵列で区画した範囲に3間×4間の3棟の大形掘立柱建物を中心にして、2間×2間の総柱の掘立柱建物7棟、と同じく2間×2間の小規模な掘立柱建物を3棟、北方を溝で区画した中規模掘立柱建物3間×4間の合計14棟が大浦B遺跡の第I・II・VI次調査で確認している。

柵列内には11棟、柵列外西方に3棟の配置である。大浦遺跡群としては、21棟検出している。柵列で区画した周辺に掘立柱建物が集中することから、大浦B遺跡が官衙の中心と考えられる。

出土遺物としては、B群10類の「稜塊」等がある。

III期の遺構（8世紀末葉~9世紀初頭）

基本的には、II期の掘立柱建物群と同じである。総計、26棟で建て替えが行われた時期にあ

たる。

IV期の遺構（9世紀初頭）

官衙の機能が失われた直後に、構築された遺跡群である。4棟の掘立柱建物と土壙17基、溝状遺構1基、焼成竪穴遺構4基を確認している。第32図は、今回の調査区で検出した遺構で、IV・V期に位置する遺構群を砂目のスクリントーンで示した。B Y55西部、2基の柱穴を始め溝状遺構9基、土壙16基が認められた。

中・近世の遺構

これまでの調査区の中では、最も多数の遺構が検出された。特に近世においては、大形の溝状遺構を始め、柱穴群は掘立柱建物を構成していたと推測される。近世の大規模な発掘調査としては、米沢城跡「東二の丸」がある。

発掘調査の成果から近世は、礎石の建物が主流となることが判明している。この箇所は、大名屋敷があった場所であり、格差があると考えられる。庶民は、近世のどの段階まで掘立柱建物であったかは、明らかではないが、少なくとも17世紀初頭頃は、掘立柱建物が主流だったといえる。

調査区の北方箇所を選択したのは、水利の便利な場所として考慮した結果と推測され、西から東に流れる小河川が蛇行する場所であり、水を引くのに適していた地形であったことが伺える。

2 大浦B遺跡の遺物

出土した遺物は、奈良・平安時代の須恵器、土師器、中・近世の陶磁器に大別される。須恵器、土師器は、土壙や溝状遺構の覆土からの出土であった。破片で占められ壺や壷で復元できたのは、1点もなかった。

復元できたのは、須恵器壺類であり8世紀中葉～9世紀後半までの時期に併行する遺物群であった。この中では、8世紀末葉～9世紀初頭の遺物が多く認められた。また、窯道具の焼台も始めて出土しており搬入した理由は不明であるが、窯場を特定できる資料として注目したい。

中世の遺物としては、珠洲系陶器の捕鉢がある。この時期は、出土遺物が少ないとから貴重な出土であった。

近世の遺物も出土数は、少量であり、染付けの伊万里瓶や飯碗の日用雑貨品で占められている。

3 まとめ

大浦遺跡群の調査としては、今回の調査を含め第18次を数える。遺跡群のなかで最も小高い大浦B遺跡の柵列施設を中心に分布することが、今回の調査によって明確になってきた。

官衙は、土器と遺構の分析から、2時期に亘って存続した。従来の集落を撤去して官衙を建設した痕跡を有する。建設時期は、8世紀中葉期で8世紀後半に建て替えを実施している。建て替えするために掘られた柱穴には、多量の焼土や炭化物が認められた。火災の原因は不明であるが、調査区から鉄鎌が出土しており、襲撃を受けたとも考えられる。その後、漆紙文書が示すように9世紀初頭で官衙の機能を失ったものと言える。

県内の郡衙に関する遺跡は、川西町道伝遺跡、南陽市郡山遺跡、高畠町町尻遺跡、村山市郡山遺跡がある。高畠町町尻遺跡は、7世紀の遺物も認められ注目される。

高畠→南陽→米沢→川西の順で郡衙が建設された可能性が高いと推測される。しかし、いず

れの遺跡も郡衙と推測できる一部の資料にすぎないのが現状である。

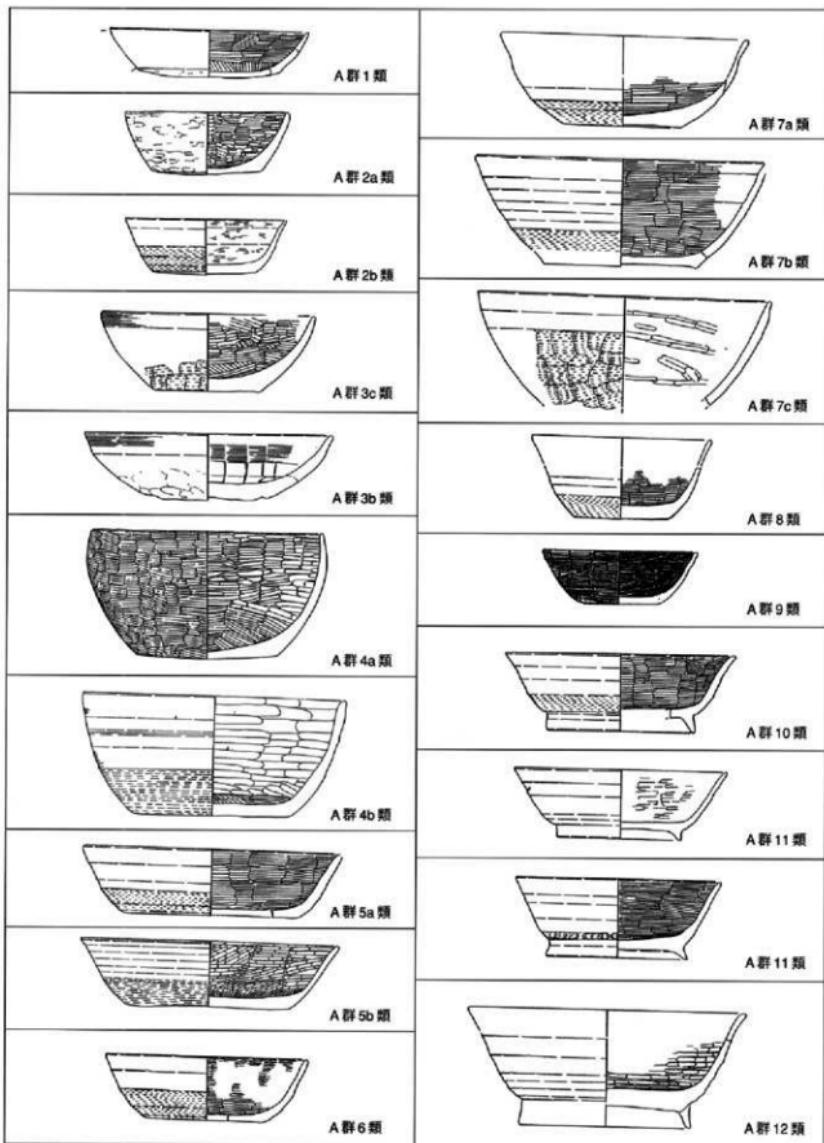
大浦遺跡についても、一部未調査箇所もあり全容が明らかになった訳ではない。従って、現段階で言えることは、柵列で区画された掘立柱建物群が正倉なのか、群序なのかは断定できないが地形等から判断すれば、後者の可能性が高いと考える。

最後になりましたが、今回の調査にあたりご協力頂きました関係各位及び、調査に参加した作業員の方々に心からお礼申しあげます。

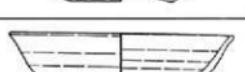
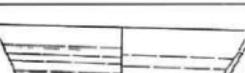
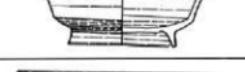
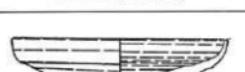
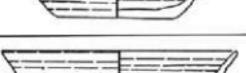
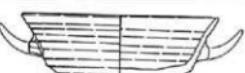
参考文献

- 1981 手塚 孝 他 「笠原」米沢市埋蔵文化財調査報告書第7集
米沢市都市計画課 まんぎり会 米沢市教育委員会
- 1984 藤田有宣 他 「遺伝遺跡」発掘調査報告書 川西町埋蔵文化財調査報告書第6集
川西町教育委員会
- 1986 手塚 孝 他 「上浅川」第3次発掘調査報告書
米沢市埋蔵文化財発掘調査報告書第15集 米沢市教育委員会
- 1987 手塚 孝・菊地政信 他 「大浦A遺跡・大浦C遺跡」発掘調査報告書
米沢市埋蔵文化財調査報告書第18集 米沢市教育委員会
- 1991 菊地政信 他 「大浦B遺跡」発掘調査報告書
米沢市埋蔵文化財調査報告書第29集 米沢市教育委員会
- 1992 手塚 孝・山田 隆 「大浦C遺跡」発掘調査報告書
米沢市埋蔵文化財調査報告書第33集 米沢市教育委員会
- 1993 手塚 孝・菊地政信 「大浦B遺跡」発掘調査報告書
米沢市埋蔵文化財調査報告書第36集 米沢市教育委員会
- 1998 月山隆弘 「大浦A遺跡」発掘調査報告書
米沢市埋蔵文化財調査報告書第59集 米沢市教育委員会
- 2000 菊地政信 「大浦」大浦B遺跡発掘調査報告書
米沢市埋蔵文化財調査報告書第67集 米沢市教育委員会

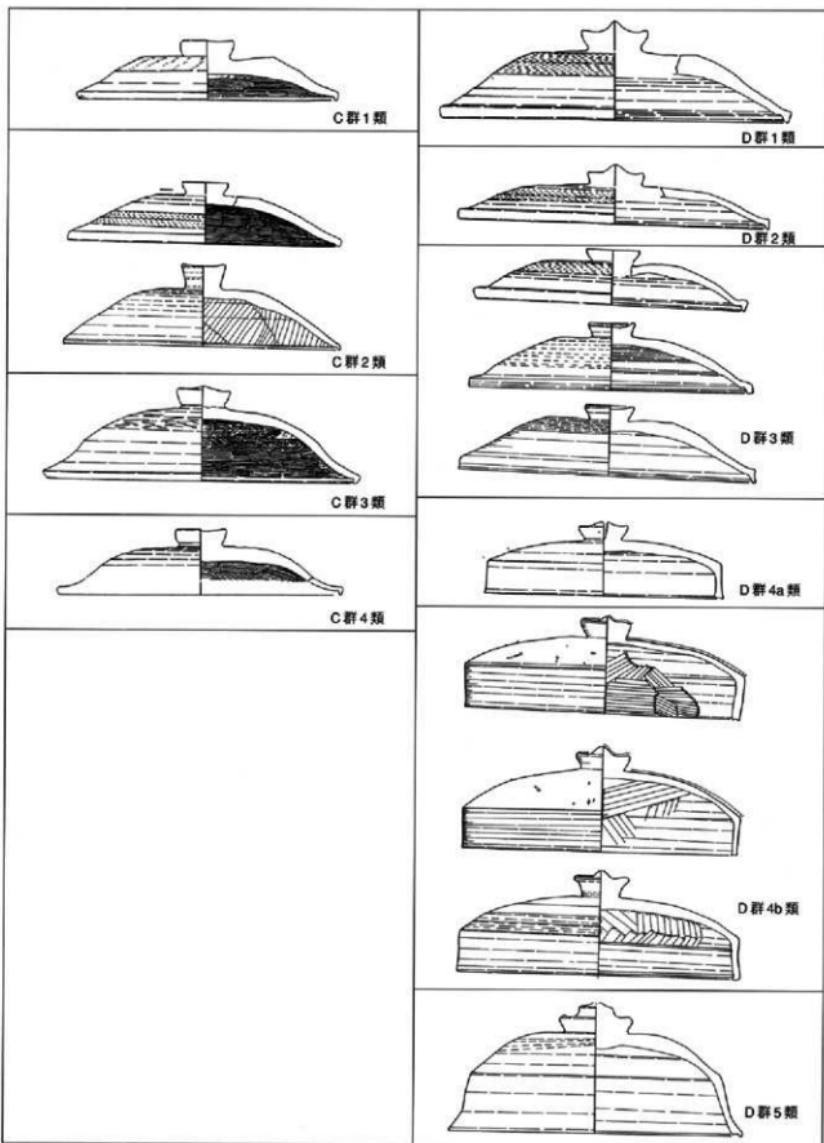
第1表 大浦B遺跡出土A群土器分類表(1)



第2表 大浦B遺跡出土B群土器分類表(2)

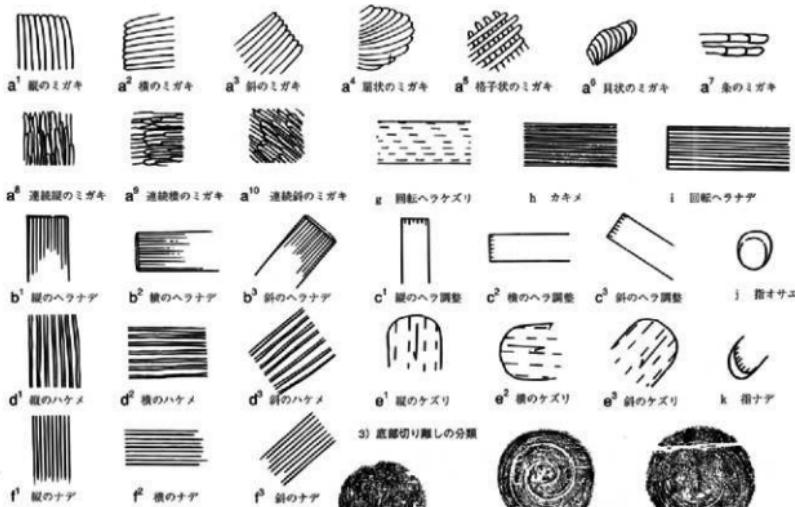
	B群1類		B群8類
	B群2類		B群9類
	B群3類		B群10a類
	B群4類		B群10b類
	B群5類		B群11類
	B群6類		B群12類
	B群7類		B群13類
	B群8類		B群14類

第3表 大浦B遺跡出土C・D群土器分類表(3)



第4表 土器調整手法分類表

1) 土器調整の分類

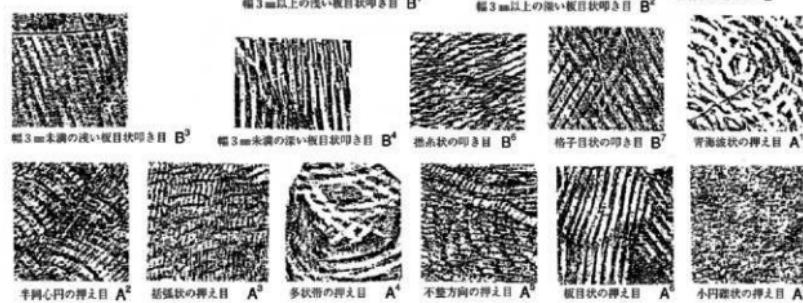


2) ロクロ形成の分類



ロクロ a 水引ロクロの後縁が1.5mm未満
ロクロ b 水引ロクロの後縁が1.5mm以上
ロクロ c 水引ロクロの凹縫が1.5mm未満
ロクロ d 水引ロクロの凹縫が1.5mm以上

4) 印き目・押え目の分類

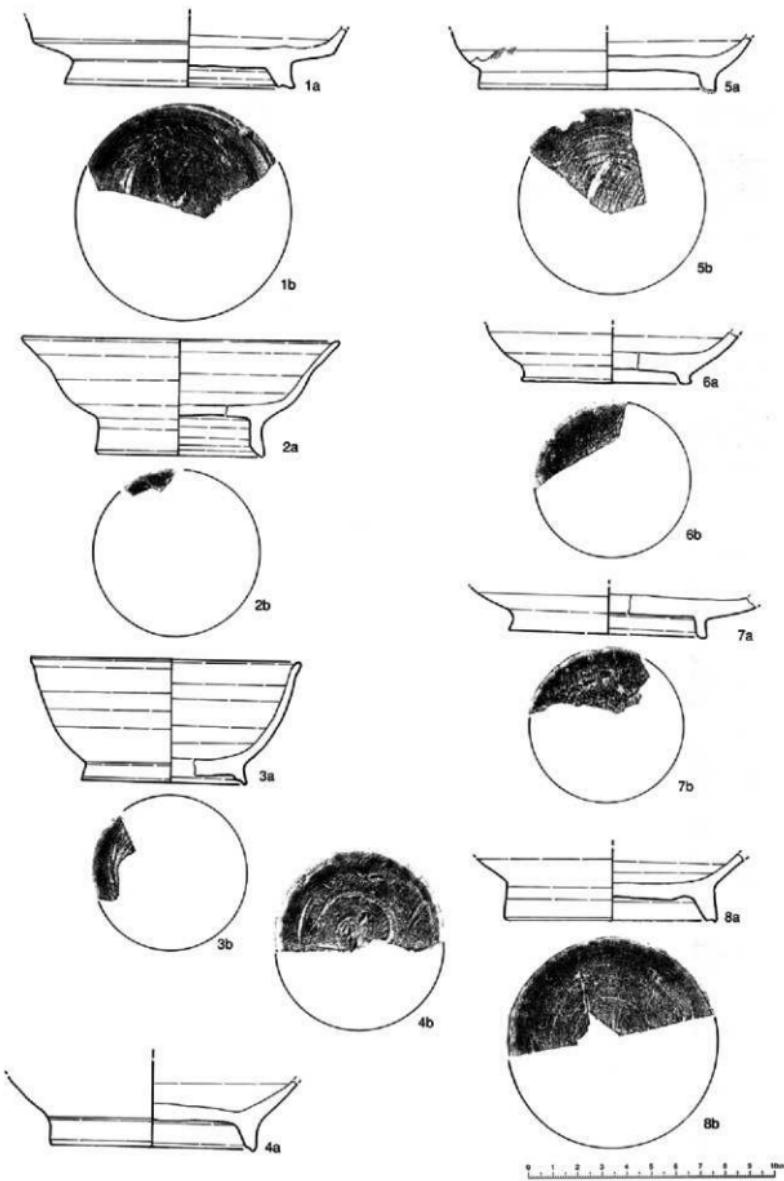


第5表 大浦B遺跡出土土器編年表

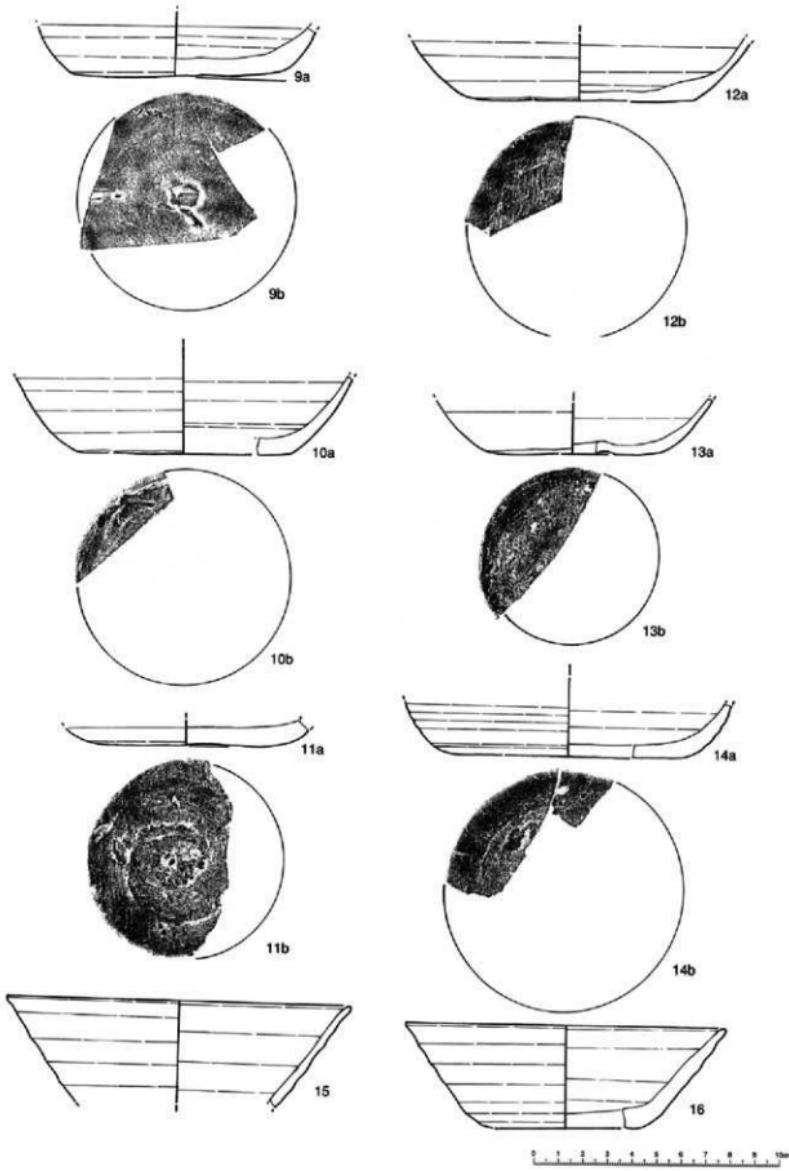
形式	年代	大浦B遺跡出土土器の分類	関連遺跡
I期	8世紀中葉以前	A群1類 A群3類 A群4類 C群3類	木和田古墳・笹原・長手古墳・上浅川a・大浦C
II期	8世紀中葉	A群2類 A群5類 A群7類	横山b・笹原・八幡原No30
	8世紀末葉	A群8類 A群9類 A群10類 C群3類 C群1類 E群	・31・道伝V下(川西)・大浦C・上浅川a
III期	8世紀末葉 (9世紀初頭)	A群2類 A群6類 A群11類 A群12類 C群4類	上浅川a・八幡原No30・31 ・道伝V上(川西)・大浦A
IV期	9世紀初頭～中葉		道伝V上(川西)・清水北C・笹原
V期	9世紀中葉～後半		笹原・道伝V下(川西)

第6表 大浦B遺跡出土須恵器編年表

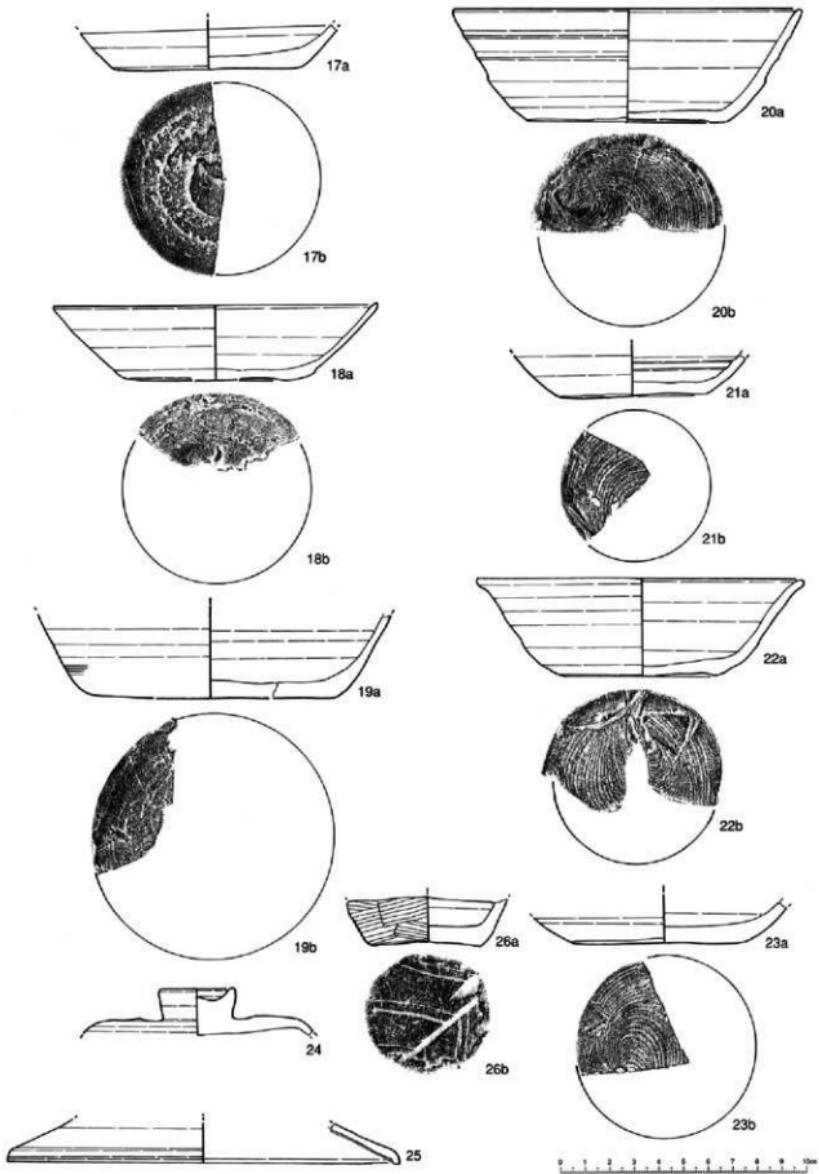
形式	年代	大浦B遺跡出土土器の分類	関連遺跡
I期	8世紀前半～中葉		木和田古墳・長手古墳・大在家(高畠)
II期a	8世紀中葉～後半	B群1類 B群3類 B群6類 B群10a類 D群1類	上浅川a・笹原・大浦C
	8世紀後半 8世紀末葉	B群2類 B群3類 B群4類 B群5類 B群7類 B群10b類 B群12類 D群2類 D群4類	成島・笹原・上浅川a・大浦C・壇山窯跡(川西)・大明袖窯跡・道伝V下(川西)
III期	8世紀末 (9世紀初頭)	B群5類 B群7類 B群10c類 B群11a類 B群13類 D群3類 H群	笹原・大明神窯・上浅川a ・大浦C・壇山窯跡(川西) ・V下(川西)
IV期	9世紀初頭～中葉	B群8類 B群11b類 B群14類	清水C・笹原・道伝V上(川西)
V期	9世紀中葉～後半	B群9類	笹原・道伝V下(川西)



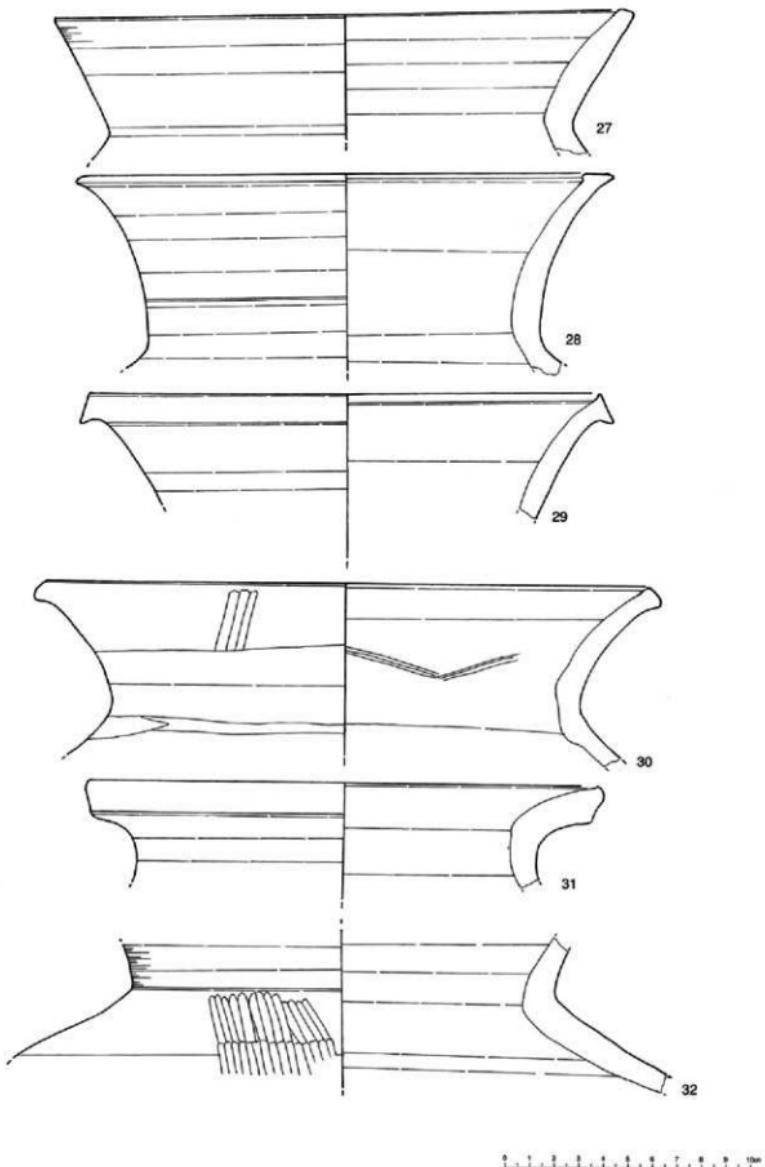
第17図 大浦B遺跡第IX次調査 出土遺物実測図(1)



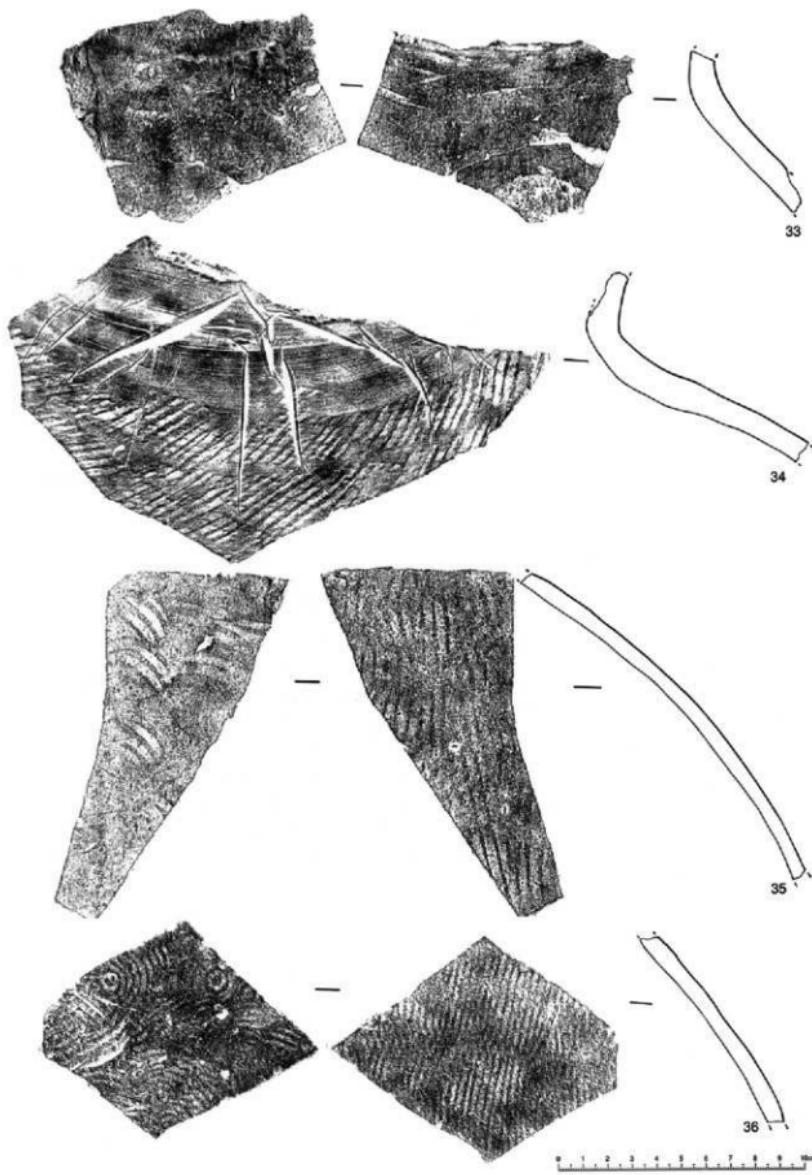
第18図 大浦B遺跡第IX次調査 出土遺物実測図(2)



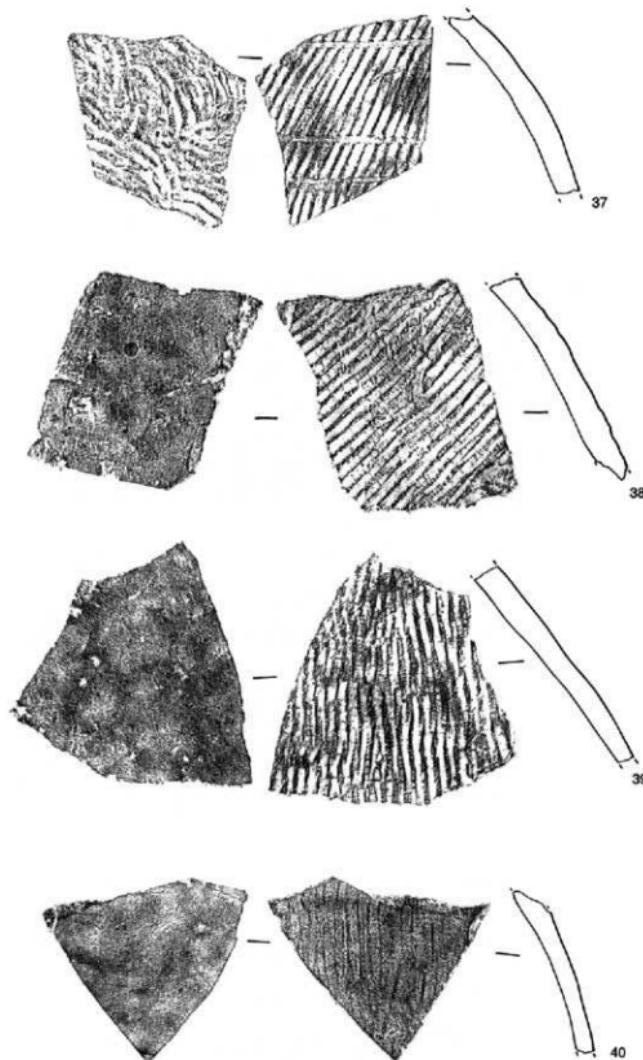
第19図 大浦B遺跡第IX次調査 出土遺物実測図(3)



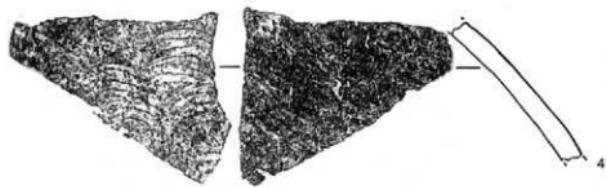
第20図 大浦B遺跡第Ⅸ次調査 出土遺物実測図(4)



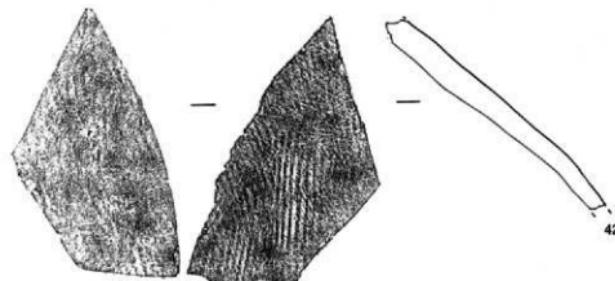
第21図 大浦B遺跡第IX次調査 出土須恵器拓影図(1)



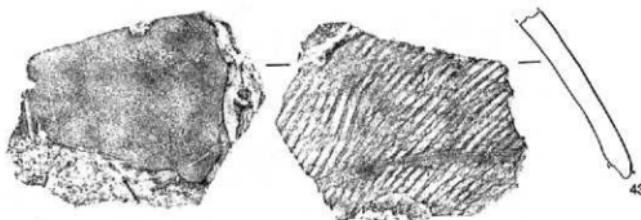
第22図 大浦B遺跡第IX次調査 出土須恵器拓影図(2)



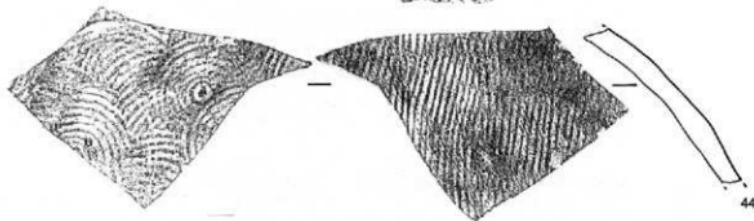
41



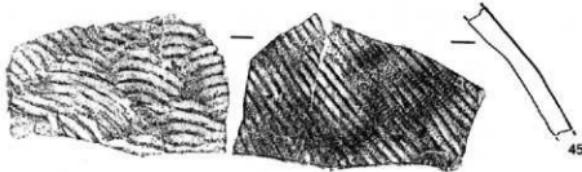
42



43



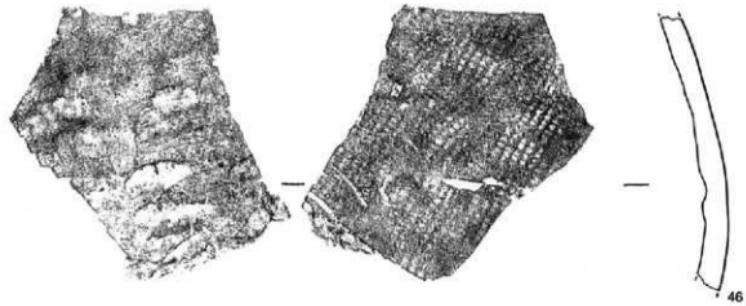
44



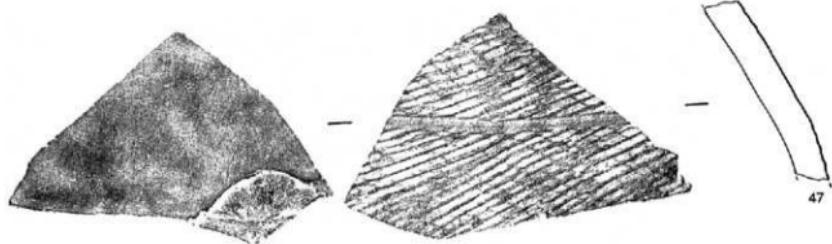
45



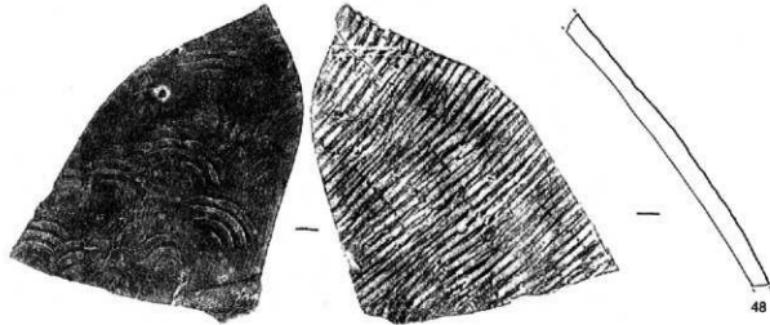
第23図 大浦B遺跡第IX次調査 出土須恵器拓影図(3)



46



47

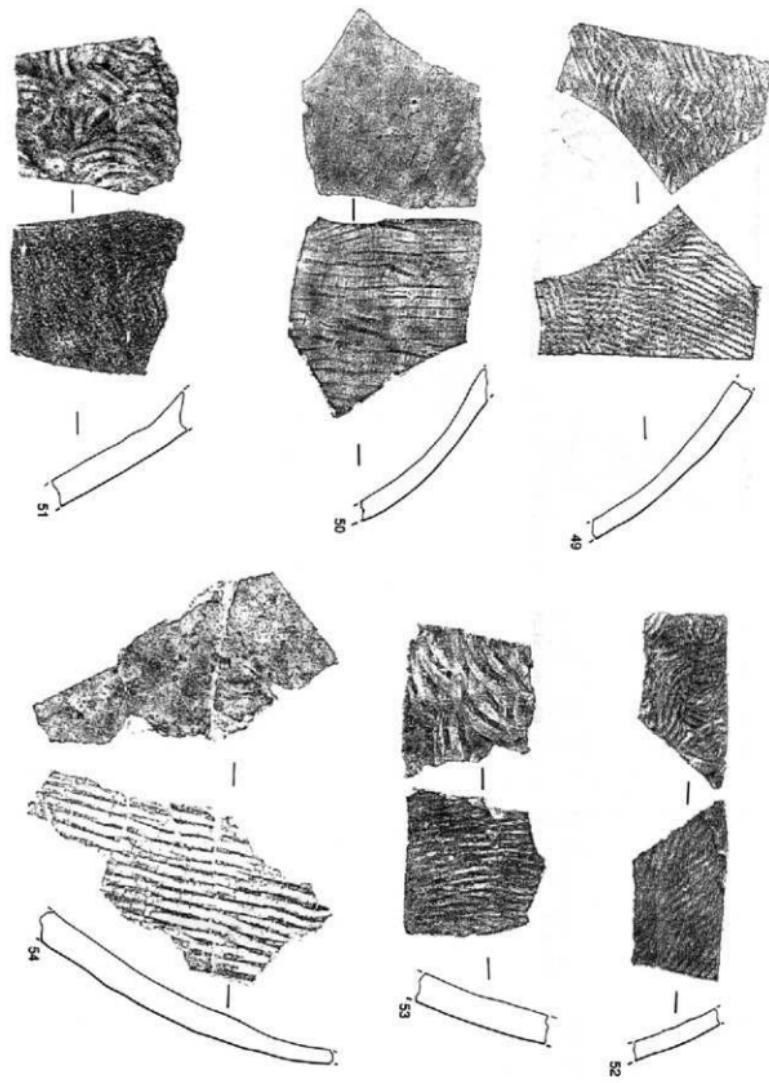


48

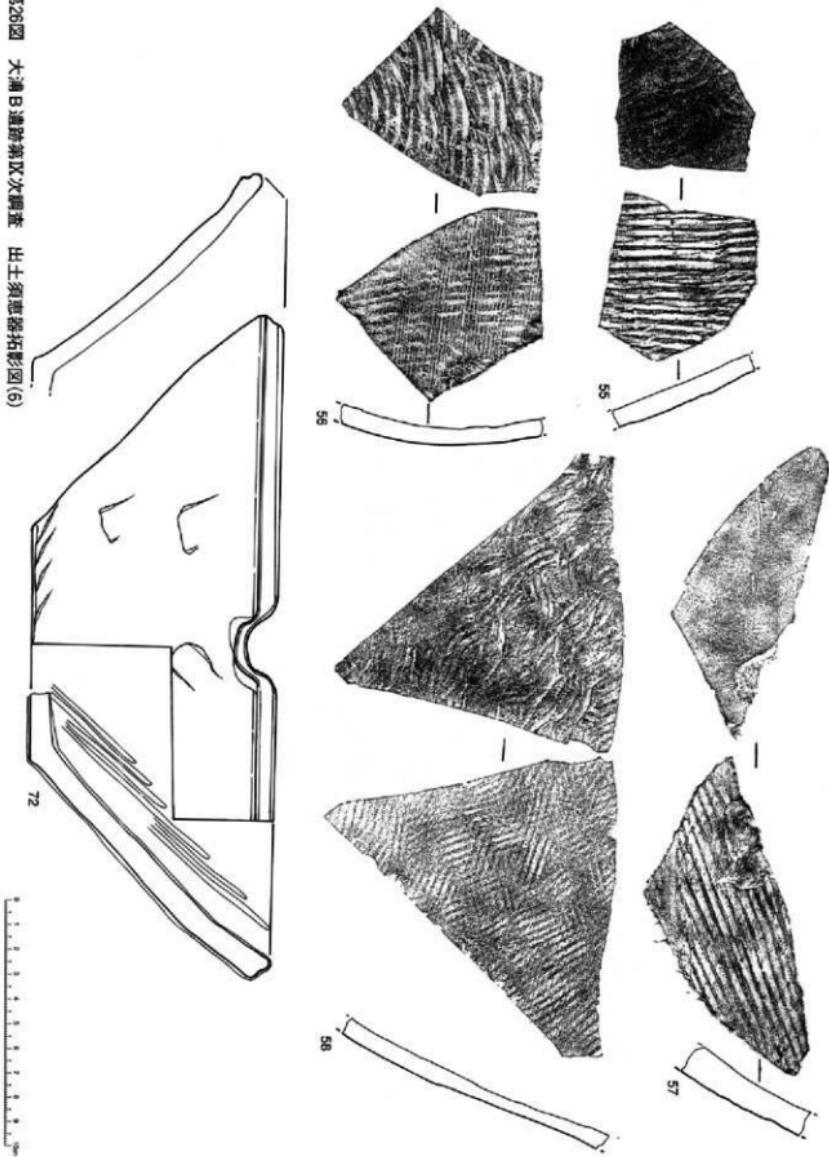
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 cm

第24図 大浦B遺跡第IX次調査 出土須恵器拓影図(4)

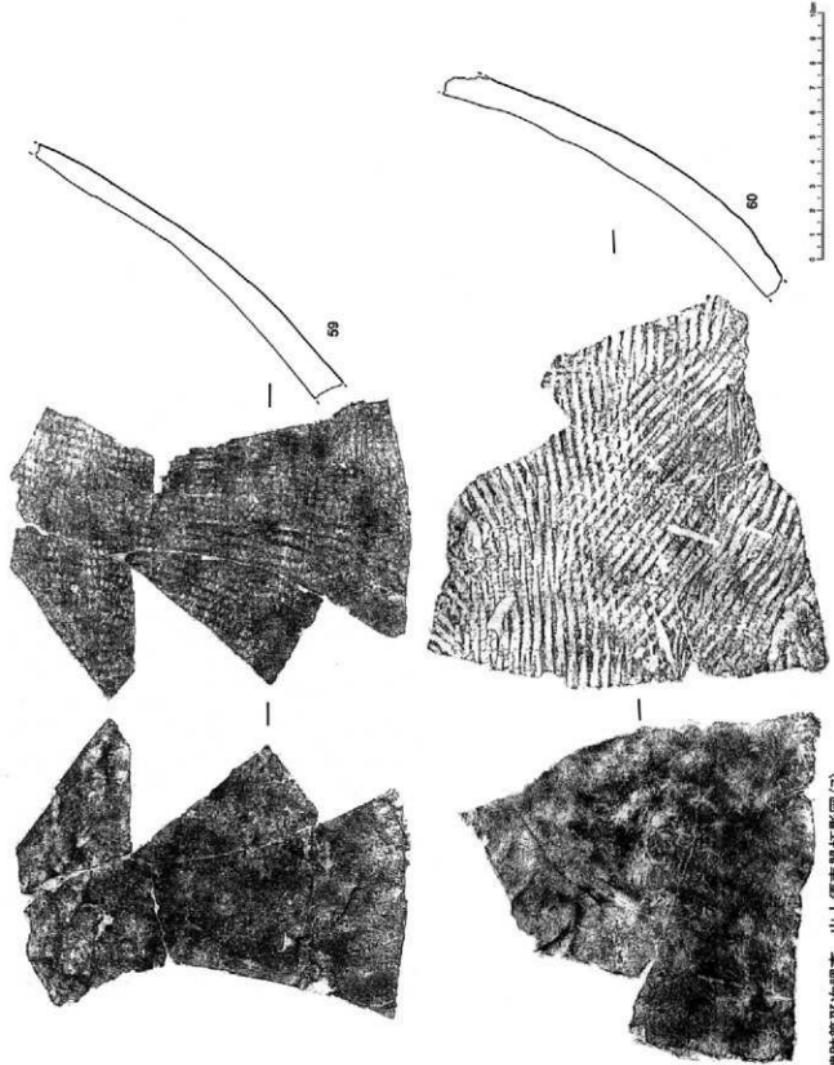
第25図 大浦日道跡第次調査 出土須恵器拓影図(5)



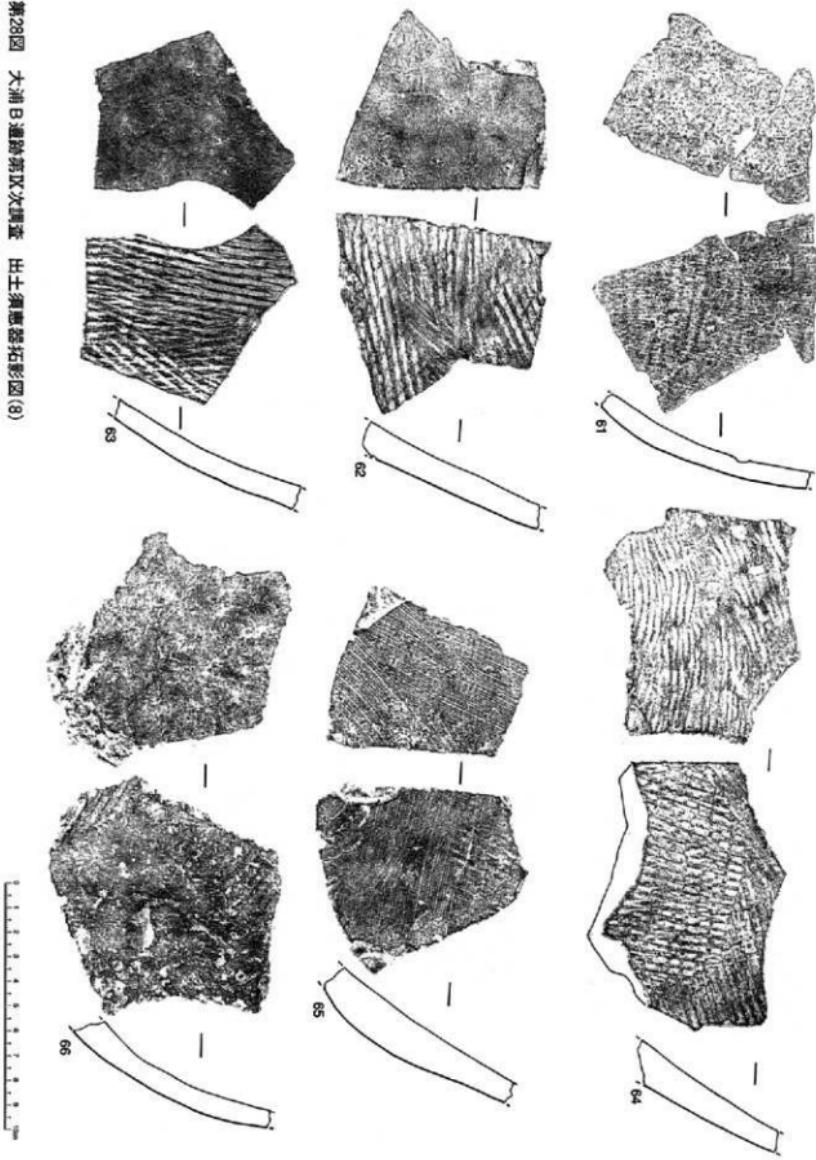
第26図 大浦B遺跡第5次調査 出土須恵器拓影図(6)



第27圖 大浦B遺跡第1次調查 出土須臾器拓影圖(7)

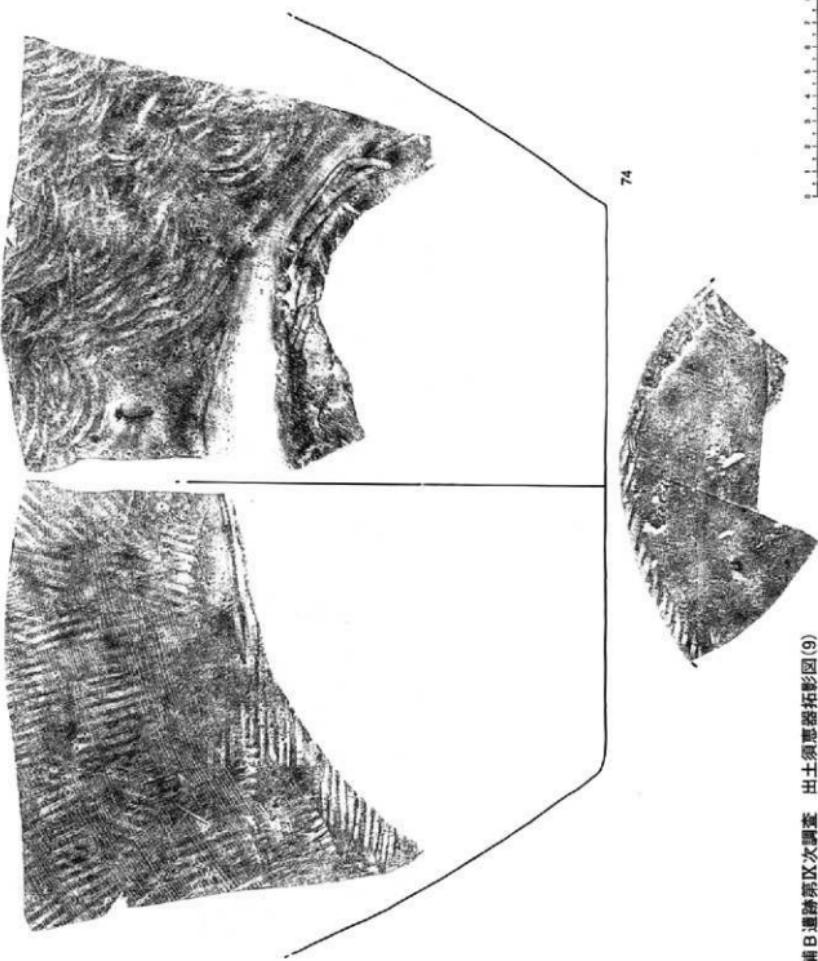


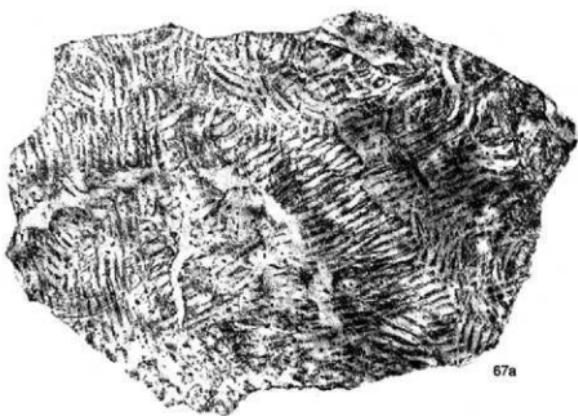
第28図 大浦B遺跡第2次発掘 出土須恵器拓影(8)



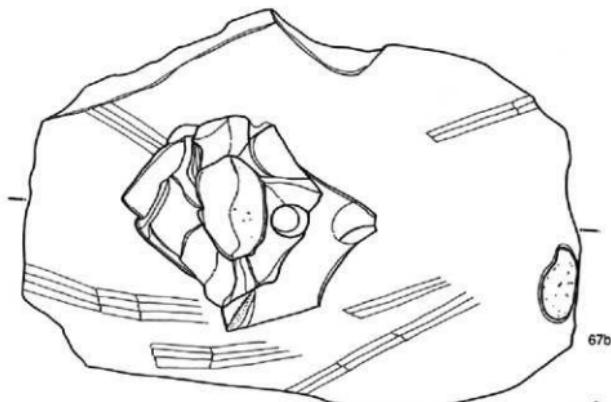
第29圖 大浦B遺跡第IX次調查 出土須磨器拓影圖(9)

Figure 29: Topographic drawing of the unearthed Muramaki vessel fragments (9) from the ninth survey of the Daipu B site.

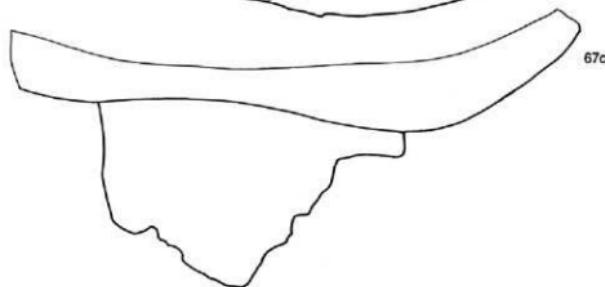




67a



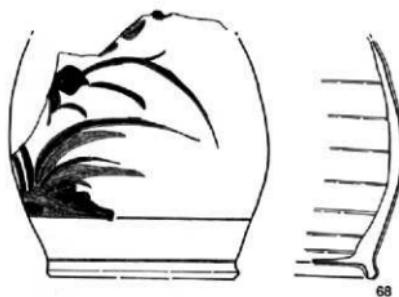
67b



67c



第30図 大浦B遺跡第IX次調査 出土須恵器窯道具実測図(1)



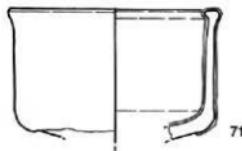
68



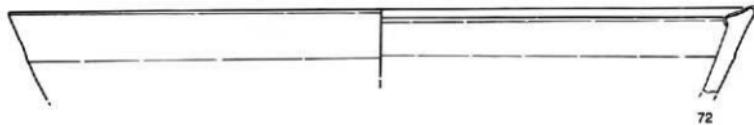
69



70



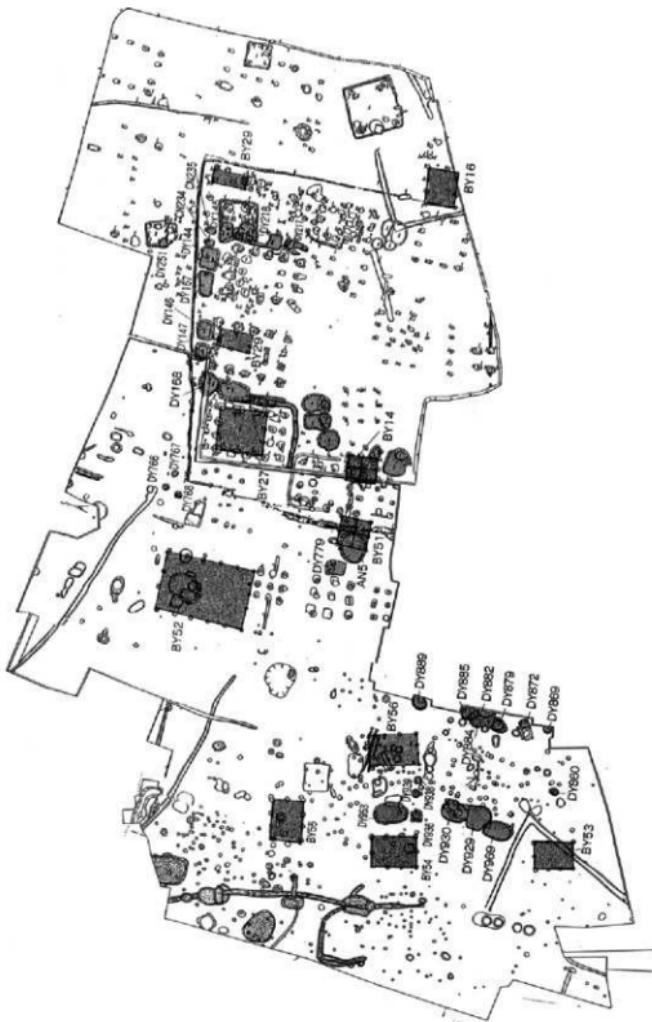
71



72

6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

第31図 大浦B遺跡第IX次調査 出土陶磁器実測図(1)



第32図 大浦B遺跡第IV・V期遺構全体図

報告書抄録

ふりがな	おおうら　いせき
書名	大浦B遺跡
副書名	大浦B遺跡 第Ⅸ次発掘調査報告書
卷次	
シリーズ名	米沢市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第83集
編著者名	考古学信
編集機関	米沢市教育委員会
所在地	〒992-0012 山形県米沢市金池三丁目1-55号 TEL(0238)22-5111
発行年月日	平成16年3月31日(西暦2004年)

ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コ一ド		北緯	東経	調査機関	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
大浦	山形県米沢市 中田町 字大浦 287外	6202	米沢市 遺跡番号 J-245	37度 56分 00秒	140度 7分 30秒	20020607 20020610	960m ²	多目的ホ ール建設 に伴う緊 急発掘調 査

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大浦	官衙跡	奈良・平安	掘立柱建物跡・ 土壙・溝状遺構	土師器 須恵器・陶磁器 類	横列で区画した範囲 が郡庁である可能性 が高くなってきた。

写 真 図 版

図版 1

▲第2次調査区遺構全景（空中写真）



図版 2



▲調査区南部全景（北方から望む）



▲調査区東方部全景（西方から望む）



▲ K Y1107プラン確認状況（南方から）



▲ K Y1114プラン確認状況（北方から）

図版 4



▲ K Y1115 ブラン確認状況（東方から）



▲ K Y1076 ブラン確認状況（南東から）



▲調査区南部全景（北方から望む）



▲調査区南西部全景（北東から望む）

図版 6



▲D Y1124セクション状況（南方から）



▲調査区北西部調査風景（南西から）



▲ T Y1102確認状況（南方から）



▲ T Y1103確認状況（南東から）

図版 8



▲ D Y1125半裁状況（南東から）



▲ D Y1125完掘状況（南東から）



▲D Y1138半掘状況（南方から）



▲D Y1138完掘状況（南方から）

図版10



▲K Y1076・1105・1106完掘状況（西南から）



▲K Y1105セクション状況（西から）



▲ D Y1116遺物出土状況（南方から）



▲ D Y1116完掘状況（北東から）

図版12



▲出土遺物 須恵器高台坏



▲出土遺物 須惠器高台坏

図版14



▲出土遺物 須恵器壊・土篩器小形底部 (26a)



▲出土遺物 須恵器壺・土師器小形底部 (26b)

図版16



▲出土遺物 須恵器壺片



▲出土遺物 須惠器壺片

图版18



▲出土遺物 須恵器壺片



▲出土遺物 須惠器壺片

圖版20



▲出土遺物 須恵器壺片



▲出土遺物 須恵器壺片

図版22



▲出土遺物 須恵器壺片



▲出土遺物 須恵器壺片

圖版24



▲出土遺物 須惠器壺片



▲出土遺物 須惠器壺片

図版26

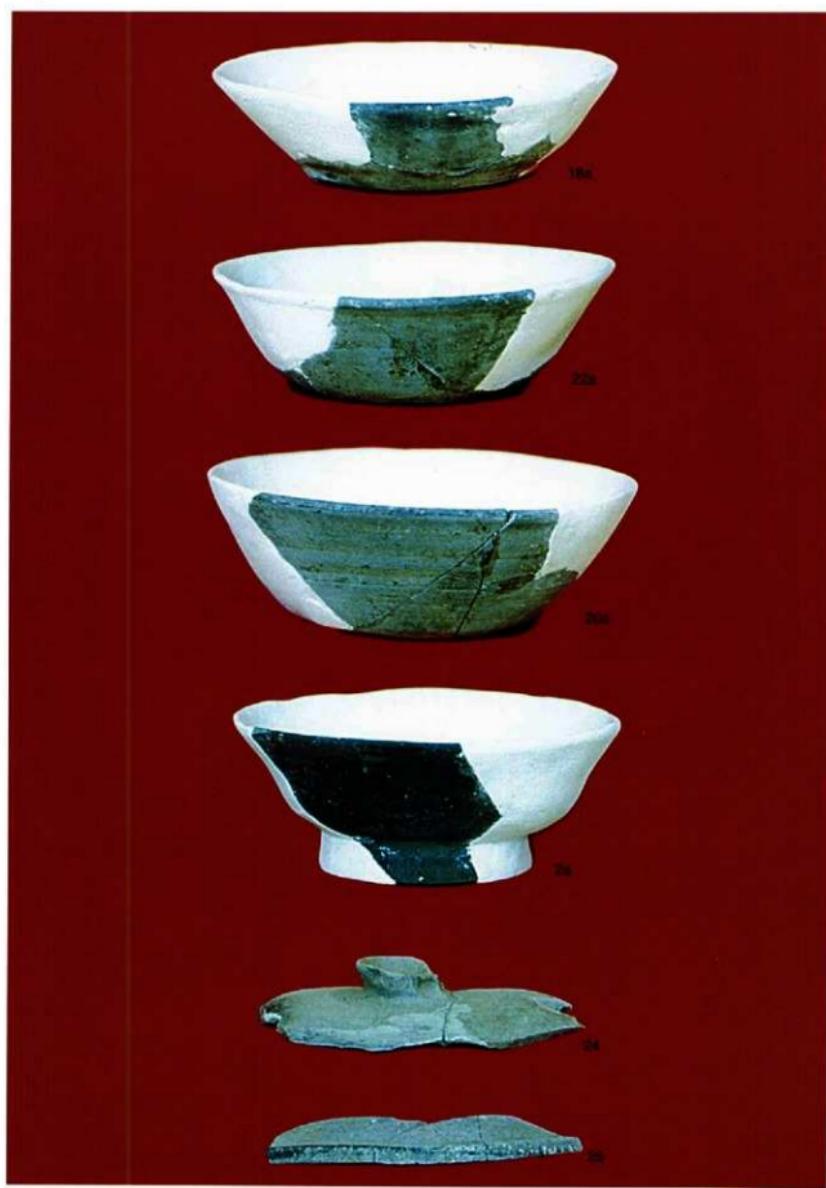


▲出土遺物　須恵器壺・壺片



▲出土遺物 須惠器壺・壺片

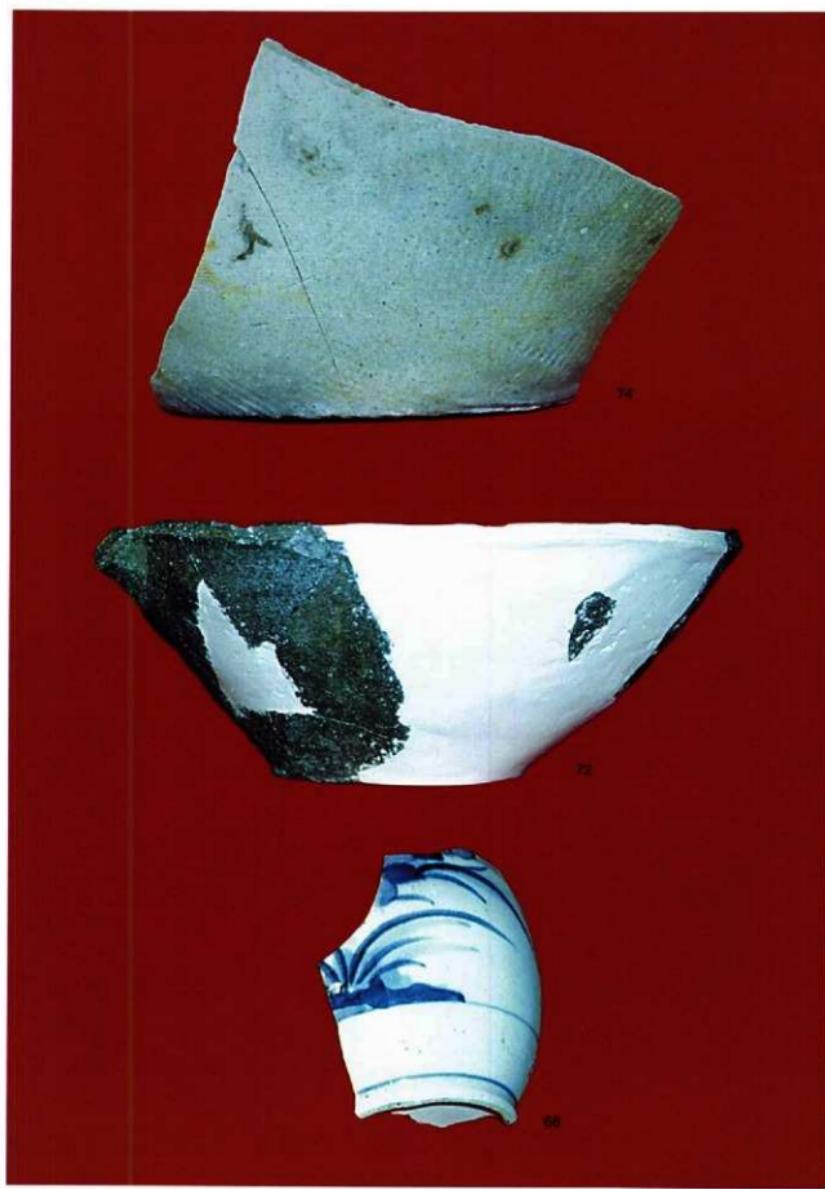
圖版28



▲出土遺物 復元須惠器高台環・蓋



▲出土遺物 須恵器窯道具



▲出土遺物 須恵器甕底部・珠洲系擂鉢・陶磁器

米沢市埋蔵文化財調査報告書 第83集

大 浦

大浦B発掘調査報告書

平成16年3月15日 印刷

平成16年3月31日 発行

発 行 米沢市教育委員会

米沢市金池三丁目1-55

T E L (0238) 22-5111

(内線 7502)

印 刷 株式会社ケムシー

米沢市通町八丁目2-43

T E L (0238) 26-2212

F A X (0238) 23-1408